
文久三年のレクイエム

なかむら 奏多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文久三年のレクイエム

【Nコード】

N0116B

【作者名】

なかむら 奏多

【あらすじ】

新選組初代局長芹沢鴨。悪名高い彼の真の姿を探りながら、新選組は何を求め時代の中でどう走り始めたのか描いて行きます。

第一章 焰（前書き）

この小説には、流血などグロテスクな表現や暴力的シーンが含まれます。ご了承の上読み進んで下さい。

第一章 焰

何がおこった。頭で理解する前に、身体が反応した。刹那に身を起こし、暗闇の中で太刀を取る。刃が翻り空を撫できらめく。

激しい雨音が、屋敷の中まで濡してゆくようだ。雨は、夏の夜の蒸せた土の匂いを運んでくる。刺客の身体から立ち上る熱気。泡立つ汗。血に滑る畳の目。障子の棧が乾いた音を立てて割れ、女の短い悲鳴が聞こえた。

切っ先に微かな手応えがあった。はずだった。しかし標的となった男は力尽き、どうと倒れた。身に付けた神道無念流免許皆伝の技も及ぶことなく。

刺客達は何かに怯えていた。怯えはさらなる興奮を呼び起こす。刺客達は、動かなくなつた男の背に、幾度も太刀を浴びせた。血飛沫の中に転がっている男の白い身体が、ただの有機物と化しているのを確認すると、

「もういいだろう。」

刺客のひとりが促すように言った。その声にそれぞれがようやく平常を取り戻し、できるだけ速くと屋敷を後にした。

ひとりを除いては。一番若い男が、鼻の下に傷を負った。大した傷ではなかったが、流れる血が唇を濡らし、拭おうとする指を濡らした。

男の肉体を引き裂く激しい痛みは、やがて潮が引くように消えていった。身体のコに残る僅かな疼きすら甘美なものに変化を遂げる。男は身体を横たえたまま、その余韻に浸っていた。

どれ程の間そうしていたのだろうか。久遠の彼方に居たような、あるいは刹那の隙間に居たような。いや、そのどちらでもないのだろう。ふいに身体が浮いたような気がした。なんの負荷も感じさせない、心地良い軽さだ。ゆっくり左右に揺れ、幾度か回転さえした。まるで胎内に宿る者のように球体となつて羊水に浮かんでいるよう

だ。懐かしさが溢れてくる。

揺らいでいる意識の底から、人々のさざめく声が聞えてくる。その密やかな喧騒に、男はゆっくり眼を開けた。

「あうっ。」

息とも声ともつかないものが、唇から転がり落ちた。男がたゆたっているのは、天井遥か高い所。そこから自分の白い肉体が、血に塗れた屍となって転がっているのが見える。隣りには同衾していた女がまた、血塗れた屍となっていた。

―死んだか。

男はぽつねんと思った。それからようやく理解した。肉体から離れた魂のみでこうしているのだと。

意外にも怒りや憤りなどといった負の感情は、湧いてこない。予感があった。生まれ落ちてからずっと。抗っても仕方の無い、いずれ来たであろうこの日を。死ぬべくして死んだ。女もまたそうであるように。ふたりには似つかわしい死に様ではないか。そういえば、この女の魂は何処にあるのだろうか。男は思いやった。しかし気配は感じて取れない。もう此処には止どまっではないのだろうか。―ならば、それでいい。

女への哀れみの情など、最初から持ち合わせてはいないのだ。

感情は一定の律動を刻み、男に静寂を与えた。その隙間をぬうように、雨音が細く流れてくる。

そうだ、雨が降っているのだ。闇を覆い地を濡ませ、全てを無かった事にしようとする雨。奴らには好都合だろう。さあ、弔いの準備が始まる。それにしてもなんの末練があつて俺は此処にあるんだ。男には当然の疑問だった。

―さて、俺はこれからどうなる。

思った瞬間だった。男の魂は、天から落ちて来た何者かの掌に驚掴みにされ、放り投げられた。息ができない。男はもがいた。物凄い速度で、底知れぬ暗闇を落ちて行く。何処まで落ちる。練獄の果てまでか。叫びが声にならない。

やがて微かに光が見えた。光はゆっくり近付いて来る。良く見る。あれは光ではない、火焰だ。俺はあの中へ落ちてゆくのだ。そして延々と焼かれ苦しむのだ。幼い頃に見た地獄絵図が脳裏を過ぎる。その中の亡者に、今まさしくなろうとしている。仏は俺に弁解の余地すら与えなかったか。落ちてゆく速度が緩くなる。到着点は近い。しかし、この圧力はなんだ。すでに無いはずの身体が擦じれてゆく。赤児が世に生まれ出るように、俺は地獄へ生まれ落ちる。

やがて朱の焰が大きく口を開いて男を迎える。男は失速し、思いがけないくらいに呆気なさで着地した。圧力から解き放たれた身体は、まだ揺れているようだ。頭の奥が痺れている。男はようやく息継ぎをした。

深く息を吸い込むと、きな臭さが肺に充満した。魂にも身体があるのだろうか。現に身体の面が熱いではないか。炎は大きく揺らぎ、暗闇に影をもたらず。火の粉は舞い上がり、その影に表情を与えた。臓腑がゆっくりと溶け出してゆくようだ。地獄に生まれ出たというのに、なんといい心地良さだ。

突然大きな爆裂音が、男の耳を貫いた。生木のはぜる音だ。どうやら炎に酔ったらしい。少しの間ぼんやりしていた。

――夢か。

それにしても、やけに生々しい夢だ。身体にまだその感触が残っている。生温い血の流れ出る痛み。静寂の中に訪れる平坦な哀しみ。

男は、天をも焦がす勢いで燃え盛る炎の前に、身動きもせずに座っていた。白い頬が炎に照らし出され、いつそその白さが際立つ。男は旅装のままだ。手甲の下の掌が、冷たい汗で湿っている。何の暗示かなどとは考えないでいよう。気持ちが悪える。忘れよう。

男は何かを払い除けるように、強く目を閉じ頭を降った。

――そうだ。一度死んだと思え。

そして男はゆっくり目を開けた。結界は破られた。今ここに炎となつて。

文久三年二月八日。下村継次。名を芹沢鴨と改め、浪士組二百四十三名のひとりとして、江戸小石川伝通院を後にした。中山道を一歩京へ。

蕨、大宮と隊は進む。そして三日目、本庄宿は徒ならぬ様相を見せていた。

第二章 風

郷を渡る乾いた風の音が継次の耳元にまで届いてくるようだった。闇は蒼く眼前に横たわっている。

今一番愛しい女の丸い寝息を右の二の腕に抱いて、耳を澄ます。遠い昔の記憶が、ゆっくりと鮮明に甦ってくる。

地面を引き摺るように伝わって来るのは、幼い継次の哭声だ。放って置けばそのうち哭きやむ。二十も歳の離れた兄はいつものことと高を括っていた。

継次は癩癩をおこしては哭く。人の感情が思いがけずも発する空気の振えに敏感な子供だった。得体のしれない怯えが、咀嚼されないまま憤りに変わる。感情を押える術を知らない幼い者は、ただ哭くしかない。

「困ったもんだ。」

と言いながら、誰もそれをきつく咎めだてはしなかった。

ほかの兄弟とは歳のかけ離れた末っ子だ。しかも物心の付かないうちに母親に逝かれた。この子を哀れに思うのか、それとも母を知る者の弟への後ろめたさなのか、兄にはよく解らないでいた。母は亡くとも強く育てなどとは、とても言えた筋合いではない。ただ幼子を護るべき者のひとりに俺が数えられるならその使命を果たすまでだ。

兄はそう覚悟し、子がない代わりに継次を可愛がった。

哭き声は止まず、嗚咽となり、やがて咳や嘔吐が混じる。

行つてやれと言わんばかりに、父が目配せする。兄は散薬を作る手を止め、母屋から走り出た。みると継次が白い晒し反を抱いて哭いている。一瞬不思議な光景が時を止める。兄はそうつと近寄ってみる。抱いているのが反ではなく、猫だというのが解る。祖母の可愛がっている子猫を死なしてしまったと哭く。猫は力無く継次の腕のなかでくたたりとしている。

「どれ。」

兄は猫を掬い上げて腹に耳を寄せてみる。コトコトと小さく速い鼓動が確かな生を刻んでいる。

「大丈夫だから安心しろ。」

猫の背中を軽く叩いてやる。

ケツ。猫は喉に詰まっていた息の束を吐き出すと大きく欠伸をした。そして何事もなかったようにするりと地面に降り立った。

「ほらな。大丈夫だろ。」

継次が頷いた。一緒に遊んでいた子供らが、遠巻きに見ている。皆一応に安堵の表情を浮かべた。

「玄太が猫を放り投げた。そしたら動かなくなった。」

ひとりと言つと他の子が同調し、口々に玄太がやったと言いつつ。おそらく遊んでいる間に気に添わない事が起きたのだろう。放られた猫はいい迷惑だ。

「理由はどうでも小さいものや弱いものを苛めちゃ駄目だ。解るな。さつ、灸でも据えてもらおうな。気が落ち着くぞ。」痼癢を起こすと、祖母が背中に灸を据える。それが利くのか、哭き止み眠ってしまふのがいつもだった。

「解つててやった。」

継次の声はまだ震えていた。

「猫を投げたら死ぬるかもしれんと解つててやった。」

この子が畏れているのは、自分の中にある深い流れの淵。呑み込まれそうになるのを懸命に堪えている姿。

大丈夫、乗り越えて行け。お前ならやれる。俺が護つてやれるのは今だけだ。闘うのはお前なんだ。

兄は弟の柔らかい手を握り絞めた。頼りない儚い感触が兄の掌に吸い付いてくる。

蒼い闇を行け。それがお前に与えられた、そして俺に与えられた試練だとするならば、供に受けて立とう。

どうやら兄の記憶と猫の記憶が緋い交ぜになっている。兄は確かに

行けそして闘えと言った。

今となつては幻のように不確かな記憶だ。その兄もすでにこの世には存在しない。

家督は、次兄が継いだ。幕吏に追われている継次の身を次兄が匿っていた。

追われる理由。部下三名の首を刎ねたのを届け出なかった。それは本当だ。三百名に及ぶ配下の中には、天狗組の威を借りて好きな事をやり出す者も出て来た。とりわけこの三名は、悪質だった。

勝手に金策を行い遊興の費用にあてていたのだ。それも一度や二度ではない。見過ごす訳にはいかなかった。金策を指揮していた継次にも責任の一端が及んだため、やむを得ず暫首した。短慮だとは思っていない。これも必要なことだ。でなければ天狗組は些細な所から崩れていく。

所帯は日がますに連れ膨れ上がっている。金がかかるのは必然だ。金策も手当たり次第に行う。しかし、どこからどれだけ用立てさせるかは用意周到に行う。

東禅寺のイギリス公使館襲撃の前に佐原の豪商から八百両を用立てさせた。ただ暴れて押し借り同然にせしめて来れる金額ではない。

「あれが押し借りでなくてなんだと言うんだ。」

同行した田中伊織が鼻で笑った。

暴れはしないが威圧はしている。

相手が解つていようがいまいがお構いなしに尽忠報国の心を解く。懐の鉄扇をちらつかせる。

だから軍師金が必要なのだ。用立てろ。そして相手を見据えて動かない。もし嫌だと言おうものなら、つぎの瞬間には懐の鉄扇がひらめき命が無いであろう錯覚を与える。殺気は無い。その代わり渴いた虚無の中に恐怖だけが沸き起こる。これ以上この男に係わつてはいけない。そんな底知れぬ威圧感を継次は身に付けていた。

「脅しているのと変わらないぜ。」

伊織が言う。

「そう、見えるか。俺にそんな気はさらさらないんだがな。」

継次が真顔で言うので伊織はおかしくて仕方なかった。

伊織には自分の底が見えていた。だが、この男には底がない。得休がが知れぬのが面白い。

時折つるんでは、仕事をした。その殆どが金策だった。

「あんたはそれでいいのか。野口にいいように使われてるんじゃないのか。」

伊織は一度尋ねたことがあった。野口哲太郎と継次は盟友だ。少なくとも継次はそう思いたい。

「誰かがやらなきゃならんだろう。汚い仕事だが俺には向いてるらしい。」

そう言つて笑つた唇がほんの僅かゆがんだのを伊織は見逃さなかった。

ただこの度の八百両にはさすがの野口も継次の力量を認めざるを得なかった。すぐに天狗組の幹部に抜擢された。諸手を挙げての話ではないことぐらい解っていた。継次の日頃の仕事ぶりを快く思っていない者も多かったのだ。金の流れは全て下村達に握られている。幹部にしようものなら奴等付け上がる。

「野口、気をつけて置かないと足元をすくわれるぞ。」

そう言つて憚らない者すら居た。継次を天狗組にひっぱりこんだのは野口だった。いいように使っていると思われるのは心外だった。だから形を見せた。

継次は嬉しかった。求めてきたものが、ようやく形を見せ始めてきたのだ。

しかし、それも束の間だった。藩政の中核が穩健派に移行し、尊攘激派の天狗組は水府からの激しい弾圧を受けることになったのだ。

継次は寝返りを打とうと色橋の首筋から二の腕を抜こうとした

「嫌っ。」

色橋が腕にしがみついた。色橋は妓楼の女だ。馴染みの妓楼に潜伏

していた継次は、その間に金の流れを記した書類などを全て処分した。いつ捕縛されてもいのように。

芹沢の家に戻る時に、付いて来ると言ってきかない色橋を仕方なく連れ返った。

「継さんのことが好きだから。」

腕にしがみついて離れない子犬のような女だ。

少しの間も離れていかなかった。

先がないのが解っているから。

この人は、すぐに何処かへやられてしまう。そして二度と会えない。暗い闇の中で、色橋は眠っている継次の唇に自分の唇を重ねてみた。そして頬に触れ、肩に顔を埋めた。この唇も、肌も、肩の肉付きも、忘れないでいよう。全て忘れないでいよう。しかし女は、去って逝く男の温もりを何時迄もその肌に止どめていることは出来ない。

色橋が肩を震わせている。継次はそのたつぷりとほどいた髪を撫でた。

忘れないでいよう。俺は指に絡まる長い髪に染み込んだ薫りを覚えていよう。

「色橋。」

抱き締めた女の体が案外と細く、継次は鼻の奥が熱くなった。

やにわに継次は雨戸を開け、凍えた露の上にひらりと降り立った。走り出る音が聞こえる。男達が声を掛け合う。大声で怒鳴り合っている。捕縛を指示する声。罪状を読み上げる声。騒動は、半時にも及んだ。

色橋は膝を抱えてじっと座っていた。

「逃げて、逃げて。お願い。」

念仏のように唱えていた。

「全て終わるまでここに居るんだぞ。」

色橋は、継次にそう言われていた。

「甘いな。俺も。」

抱き締められた耳元に聞こえた継次の最期の言葉だった。頬笑んでいた。

やがて静けさが戻り、開いた雨戸からいつの間にか美しい朝陽が差し込んでいく。

色橋はおそろおそろ外へでてみた。

屋敷の外には継次の兄がぼんやりと立ち尽くしている。色橋は、その後ろにへたりこんだ。涙が溢れてくるのを拭うこともしない。

水路に沿って風が吹く。涙は風が乾かしてくれるだろう。色橋は薬指でなぞった継次の唇の形を思い出そうと、自分の唇に指をあててみた。もうすでに正確には思い出せない。色橋は声をあげて哭いた。

第三章 獄

佐原は天領である。そこで犯した罪は幕府によって裁かれる。

継次は捕縛されると、そのまま江戸は辰の口評定所へ送られた。押し借りについての審理を受ける為だ。

幾度も重ねられる吟味。口書が作られ、やがてそれに爪印を押す。それで終わりではない。刑が定められるには奉行の審理を待たなければならぬ。

花吹雪の春が往き、蝉時雨の夏が過ぎ、風儚き秋が深まり、暦が巡っていく。

養子に入った下村家とは、妻の死を境に縁を切った。

ひとり息子を託した下村家に、連座の魔手が伸びることはないだろう。幼い子供の柔らかな頬の感触と汗のすえた甘い匂い。

あと三年もすれば下村家の嫡男として元服を迎える齢に達する。父親としての務めはなにも果たせなかった。

思い起こすのは、父親を見上げる幼い仕草や抱き上げた腕に眠る重さばかり。

妻に逝かれた時期が、あまりに若く、

現実を容易に受け止めることができずにいた継次は、尊王攘夷の活動に身を投じることなどでなんとか心の均衡を保っていた。天狗組は継次にとって逃げ場だった。

息子に会わずに十年が経つ。

牢の中に居ると、失くしたものを捨ててきたものを思い出し、鬱々としてしまうのだった。

やがて江戸での審理は終わり身柄は水戸藩へ引き渡される事になった。

江戸での幽閉生活は持ち込んだ金がものをいい、さしたる不自由もなく過ぎて行ったが、

水戸細谷の獄ではそれは通用しない。扱いは士分以下。獄中の生活

は過酷を極めた。

継次を匿った芹沢家は閉門。当主の次兄は蟄居を命じられた。父親から叩き込まれた尊王攘夷の思想は次兄にも強く根差し、それくらのことは受けてたつ家風だ。継次はその家風に支えられていた。そして感謝した。

東禅寺イギリス公使館襲撃は予定通り決行され、天狗組への弾圧はますます激しいものになった。

残った者達の希望は暗澹たる港から船出したまま未だ流浪している。何も届かない。俺の声も魂も、この獄から外へでることはない。

継次らが捕縛される前に自首していた天狗組の最高幹部大津彦五郎は水府の卑怯なやり方に憤怒し、自ら食を断ち餓死した。

自首と引き換えに追随した者を許すという約束だった。が約束はいつも簡単に反故にされた。

天狗組の主だった者が次々と捕縛される現実を憤った、

それは凄まじい意志だった。

- - 俺には何ができる。

やり場のない思いが、継次をつき動かした。

意識が蒼白になる。

気付くと継次は自分の薬指の肉を食いちぎっていた。ブチリと鈍い音を発て、魅き千切られた肉の断片から朱黒い血液がゆっくり溢れ指を伝い掌に溜まる。

疼きの中から熱い哀悼と激しい憤りの歌が生まれた。

雪霜に

色よく花の

咲きかけて

散りても後に

匂ふ梅が香

白い懷紙に書かれた血文字は、静かな叫び声を発し獄の闇に沈んで

いった。

引き回しの上暫罪極刑が与えられた。しかしそれには及ばない。すでに体力は限界にきている。彦五郎のように食を断てばあつという間に死の谷へと転がり落ちて行くだろう。

怖くはない。すでに盟友達がそこでまっている。

彦五郎の死への強い哀悼の念が極まり、継次も食を断った。

冷たい壁にもたれ、静かに死の時を待つ。目を閉じたまま、乾いた唇を舐めた。

やがて幻覚が始まる。どういう訳かいつも兄の姿が見えた。

迎えに来たのだろうかとはじめは思った。しかしそうではないらしい。兄は優しい頬笑みを浮かべ語りかける。

「玄太。」

継次を幼名で呼ぶ。

「蒼い闇を行け。その先にお前が望む夜明けがある。怯むな。お前のその激しさで、乗り越えていけ。」

そして継次の頭をなでる。

兄よ。俺は、あんたの齢をやがて越えようとしている。そして今、あんたは俺になにを託そうとしている。

これは子供の頃から兄によって貼り付けられた意識だ。呪縛のように現れては消え、俺の背中を押していく。

妻を亡くし鬱々とした日々を送っていた時も背中を押したのは、あんなの言葉だった。

乗り越えていけ。

今はまだ死の時ではないのか。俺に生きろと言うのか。得体の知れない時代の渦の中を導も持たない俺にどうやって泳ぎきれと。

継次は、幻覚に苦悩した。果てしのない苦悩だった。

しかしやがて幻覚すら見なくなった。

生き長らえている苦痛だけが続いている。

そうしているうちに藩政がまたしも翻った。尊攘激派の武田耕雲斎が家老職に復帰し、穩健派は一掃された。幕府も弱体化し、安政の

大獄で囚われた政治犯は朝意により赦免された。

継次は自分の刑罰が引き回しの上暫罪から牢屋敷内での暫首晒首に変わったことを知る。

処遇が一段階上になった。とはいえ継次にとっては何も変わらない。死期を待つことにはかわりはないのだ。

しかし二年にも及ぼうとする幽閉生活は、晴天の霹靂の如く終りを迎えた。

武田耕雲斎の助命嘆願が功を奏した。と思いたかったが、様子が少し違うようだ。

幕府が内々に準備を進めている浪士組の設立に参加せよというのだ。そうすれば無事釈放それ以降おかまいなしの身上となる。

芹沢家の閉門も、兄の蟄居も不問になるというのだ。

將軍上洛の警護という目的のため、浪士組は募られる。が、それは名目上のこと。

実際のところ、暗躍する尊攘激派の浪士達の活動を掌握できず、幕府の政策は足踏み状態だ。なんとかしてこれを掌握したい。それには主だった浪士を幕府方に取り込む必要があった。そして攘夷を唱える浪士達を取り込むことで朝廷への対面を繕い、薩摩、長州、土佐の動きを封じこめようというのだ。

真っ先に名前が上がったのが清河八郎だ。

何故、清河八郎なのか。浪士組募集に向けての幕府側中心人物である山岡撤舟と八郎は剣術の同門である。顔見知り以上の関係だ。最初からふたりの間で密かに策が練られていた。

幕府の思惑は利用された。

そして未だ釈放に至らない天狗組激派の継次ら数名の名が清河八郎の思惑という名簿に書き連ねられた。

幻覚の中で亡き兄が示唆していたのはこのことなのか。継次は、納得した。ならば行かねばならぬだろう。

思惑はもうひとつ。將軍の上洛に伴い水戸藩主徳川慶篤も上洛する。激派の藩士がこれに随行する。土分でない継次らは随行が許されな

いので浪士組として先に上洛して欲しいというのである。

これが水戸藩家老武田耕雲斎の脳裏にあるもうひとつの思惑だ。

有能な幹部を次々と亡くした天狗組玉造勢は今、藤田東湖の四男小四郎を総領に迎え新たな時を刻もうとしていた。

士分である小四郎は、藩主に随行して上洛する手筈になっている。

継次らは、浪士組参加を隠れ蓑に、別動隊として上洛し彼らと共に水戸藩と薩長間を周旋せよ。

「これは藩命と思ってくれてよい。」

耕雲斎はにべもなく告げた。否応なしということなのだろう。

「以降おかまいなしか。」

芹沢家の閉門もこれで解ける。

自分の事はともかく、芹沢家のことを考えると承知せざるを得ない。芹沢家の人質に取られている。

耕雲斎も悪知恵が働く。継次は藁っってしまった。おそらく藤田小四郎も巧く耕雲斎に乗せられているのだろう。考えることはなかった。継次には異存はない。

もう天狗組も以前とは違う。時は同じように流れ、熱い思いは同じはずなのに、いつの間にか色が違っている。空白は継次の中で埋めようのない隙間となって広がっていった。

継次はすでに自分の物ではない命を懷に抱え獄を出た。文久二年十二月十八日のことであった。

第四章 絆（前書き）

獄から釈放された芹沢鴨。水戸を離れ、浪士組に参加するため江戸へ向かうことに。

新たな旅立ちが示唆するものは希望か・・

第四章 絆

夜が、明けてゆく。

空が蒼から透明へと滲むように澄んでゆき、冷えきった空気が、継次の首筋をそつと撫ぜて往く。

継次はしかめ面で歯を磨いていた。時折楊枝をくわえたまま、変わってゆく空の色をじっと見つめている。

- - あれから色橋はどうしただろうか。

消息は誰にも聞いていない。まだ年季は明けていないはずだ。元気で居るだろうか。まだあの技楼に居るのだろうか。知りたい。しかし知ってどうする。

色橋のことは、口にしてはいけない。諦めなければ。

継次は地面に唾を吐きかけると楊枝を投げ、それを踏み潰した。

「どうかなさいましたか。」

奈絵が背中から声をかける。

悪戯を見咎められた子供のようになり、継次は体を震わせた。

獄から出て間なしに京へ上らねばならないというのに、継次は嫁を娶らされていた。

「冗談ではありませんよ、父上。無事にいられるかどうかも解らないと言っのに、婚儀などんでもない。」

兄供々、何度も父に談判した。が、継次の父は、一度決めたことをそう簡単に翻すような人ではなかった。

そして奈絵は嫁いで来た。

冷たく乾いた風の中に白い雪のかけらを含み込む、そんな日だった。全て承知で嫁いで来たのだ。以前のこととも以降のこととも。

慌ただしく執り行われた婚儀も、継次には何故か他人事のように思えた。釈然としないまま、奈絵と盃を交わした。もう一人の自分が、それを冷ややかに見て居る。そんな気がした。

奈絵には申し訳ないがそれが本音だ。

夫婦としての体裁を取り繕うほどに、奈絵への形だけの気持ちが無情な仕打ちのように思える。そんな自分が腹立たしい。継次はますます機嫌が悪くなつていくのだった。

- - まるで子供が拗ねているような。

奈絵は思っていた。往生際が悪い。継次にそう言つてやりたかった。そして奈絵自身へも。

旅装束を整えるための運針に余念のない奈絵は、ふと手を止め紺青の生地に淡い鼠色に染め抜かれた菱形文様の連なりに見入った。

やはり嫁いで来たのは間違いだつたかもしれない。短い間でも芹沢家の役に立てればと氣負つて嫁いで来た自分の姿が滑稽に思えてならない。

- - なにを今更。

奈絵は口元を引き締めると、再び針を進めた。細いしなやかな指がなめらかに動く。銀色の針が青い生地の海を掬つては泳いでいく。上洛は、地獄から這いずり出て来た継次にとって、新しい道筋の模索への始まり。

せめてそれに相応しい旅装を用意して送り出す事が、妻として奈絵のできることのひとつ。

おのずと願いがこもる。縫い寄せられた生地に爪できせをかけると、細かな縫い目が整然と並ぶ。息を整えて新たに針を刺す。

「奈絵。」

呼ばれるまで気が付かなかった。はつとして顔をあげると、六尺はある長身を屈めて継次の鳶色の瞳が奈絵の手元を覗き込んでいた。あまりに近くて、一瞬奈絵の意識が止まった。そして勢い良く流れだし頬を上気させた。

奈絵より一周年上だというのに、この男は時折元服前の少年のような表情をみせては奈絵を困惑させる。

これをと継次は袂から櫛を取り出した。薄紙に包まれているが一目でそれとわかる。

「お前にとら思つて造らせたんだ。」

薄紙を開くと美しい蒔絵の施された、漆塗りの上等な櫛が表れた。表は連理の枝に梅の花、裏にはひづめを上げた馬の模様だ。

継次の細かい注文に職人が応えた贅沢な品だった。

「綺麗」

奈絵はその細工の華麗さに息を呑んだ。

よく見るとその馬には額に角がある。

「これは・・・。」

「一角獣だ。西洋ではうにこおるといふ。麒麟や鳳凰と同じで伝承の中の馬だ。」

「御揃い。」

「そうだな。御揃いだ。」

継次が愛用している印籠の根付けが、この蒔絵の模様と同じ、象牙細工のユニコーンだった。

奈絵はすぐさま鏡に向かい、櫛を差し替えて継次に見せた。

「良く似合っているよ。」

「旦那様と御揃いだなんて、うれしい。」

奈絵は精一杯の笑顔をつくってみせた。

――噓つき。

奈絵は心の中で呟いた。

後ろめたさが、継次の耳の縁を微かに紅く染める。

薄く透き通った皮膚が、頸動脈から送り出される血液の量を正確に映し出している。継次は気付いていない。でも奈絵にはよくわかる。多分この櫛は余所の女に贈ろうと創らせたものだろう。奈絵が嫁いで来る、いや、獄に囚われる前から、きつとこの男の懐の奥に大事にしまわれていたに違いない。

連理の枝は夫婦の強い絆、梅は男の潔さを表す。そして根付けと御揃いのユニコーン。

強い絆を持ちたかった奈絵の知らない誰か違う女の匂いがする。でも嫉妬などはしない。今それは奈絵の手の中にある。継次と奈絵

を繋ぐ揺るぎないものの証しだ。

必要がなくなつたから奈絵に取らせたのではない。そう言って欲しい。

- - あなたの思いを私に下さい。

奈絵の眉間に切なさが滞る。

継次がいきなり奈絵を背中から抱きすくめた。

体力が戻り始めてから、継次の薄かった胸や萎えた二の腕も、しっかりした質量を持ち始めていた。その大きな身体に奈絵は包み込まれた。

「好きだ。」

継次は初めて奈絵のうなじに暖かい言葉を吹きかけた。

うなじと衿の隙間から奈絵の肌の匂いがふくよかに立ち上ぼり、継次の鼻腔を満たしていった。

幾夜も搔卷きの中で重ね合い親しんだ肌の温もりが、ふたりの間に夫婦の気安さや慈しみを芽生えさせていた。

互いの心の持ち様に、少しばかりの差があるとしても、今好きだという素直な気持ちに、偽りはなかった。

京へは赴かず、このまま奈絵と伴に残りの人生を送っても良いのではないかと、継次はふつと思うのだった。

しかし、そんな個人の事情など、たわごとにも言ってはならない。

二年のあいだに、天狗組は世代が変わってしまっていた。

命長らえて、ようやく獄から釈放された者は、病を患い精神を患った。継次をこの渦の中に巻きこんだ野口哲太郎は、床に伏せたまま回復の見込みはないという。あの若い田中伊織ですら姿を見せないでいる。

主だった幹部はほとんどが姿を消した。

そんな中、継次は藤田小四郎と面会した。久しぶりに郷校を訪れたわけだが、どうにも居心地が悪い。座って居ても尻の底が泡立つようにむず痒い。

小四郎は藤田東湖の四男だ。藩校で埋もれかけていた才能を武田耕

雲斎が目敏く見附だし、天狗組の総領に仕立てあげたのだ。すでに芹沢鴨光幹名を改めていた継次を

「芹沢先生。」

そう呼んだ。

笑った顔が、まだほんの少年のように見えた。

それにしても、この青年、なかなか如才ない。

耕雲斎はこの男の能力を最大限に利用するつもりだろうが、状況をうまく掴んで尊穰激派の旗頭に一気に踊りてきた小四郎の方が、一枚上手かもしれない。

「長州との密約は、まだ生きています。」

万延元年七月に水戸藩の西丸帯刀と長州藩の桂小五郎との間で交わされた、破成の盟約のことを小四郎は言っているのだ。

桜田門外の変は成確に言えば失敗だった。水戸激派が伊井大老を討取ったまでは良かった。それに呼応して薩摩が京で天皇を擁して挙兵し、幕府に幕政改革を迫る手筈だった。

しかし、薩摩は動かなかった。大久保利通によって薩摩激派の暴走は封じられた。

已むなく継次ら水戸激派は、そのまま次の機会に備え軍資金集めに走ったのだ。

取り返しの付かない、苦い経験だった。

事件に直接関わった者は捕えられ殺され、逃げ延びた者も自刀して果てた。

しかし、幕政の本質は何も変わらない。

桂小五郎から声が掛かったのはその後だ。

事を成すには、やはり水戸激派の行動力が必要だと。連携すれば必ず大事を成せる。

小五郎は、吉田松陰の門下の筆頭だ。水戸藩尊穰激派への認識は強い。

しかし、西丸は二の足を踏んだ。同じ事の繰り返しを恐れたのだ。要人暗殺を企て、実行するのは水戸激派の役割。

その後、長州が広く諸侯に働きかけ幕政改革を促し成就させる。そういう密約だった。

結局、長州側も水戸側も、藩上層部が難色を示したため、この密約は、西丸と桂の個人的盟約で終わった。

伊井亡き後、大老に就任した安藤信正を襲撃した時には、この盟約が果たされる事は無かった。それ自体は、西丸も最初から承知していた。長州は動かない。いくら桂が頑張っても、公武合体して国を開くという方向へ進路をとった長州藩を動かすことはできないに決まっていた。密約はあつてないようなものだった。

「桂先生は、大変心を痛めておいでです。」

小四郎は言う。西丸と桂がどう気脈を通じていようが、薩長には煮え湯を飲まされたという感の方が継次には強い。

「こちらで事を起こせば、長州が呼応するという確証が藤田君にはあるというのか。」

「あります。桂先生は信用のおける方だ。」

小四郎軽く憤慨した。

小四郎の澀みない表情が継次には眩い。血腥い嘘も裏切りも、慟哭の別れやこの世の地獄も未だ知らない、まなざしが清しい。ともすれば、卑屈に後退りしそうな継次の心を捕らえて離そうとはしなかった。

「やはり、拳兵ですか。」

継次は、その言葉を音として放って、はっとした。小四郎がすでに身を乗り出している。

「薩摩と呼応し、京で兵を挙げるといふ計画は、薩摩の内紛で成就叶いませんでした。しかし、諦めはしません。我らには、次が託されました。」

「盟約を元に、長州と連携して京で兵を挙げるつもりか。」

その事には言及しないまま小四郎は笑った。

「私は慶篤殿に随行し上洛します。そして桂先生と面会し、盟約を確固たるものにします。そして、芹沢先生。」

「で、具体的に私に何をしろと・・・。」

「長州と連絡をとりながら、京阪の志士を募って、密かに拳兵の準備を整えて欲しいのです。」

「やはり浪士組参加は、隠れ蓑ということか。」

継次は腕を組んだ。

水戸激派にとつて、清河八郎の誘いは、まさしく渡りに船だ。うまく拾われた継次の命だった。

「桂先生と面会を果たした後、我らはひとまず国許に戻って兵を募り、拳兵に備えます。」

京と関東での同時拳兵。すでに小四郎の考えていることは手にとるように解った。

継次は幕閣を欺き、清河八郎を欺き、密かな使命の遂行のため上洛するのだ。

怖い物知らずの青年に、図らずも拾われた命を賭けてみるのも悪くはないだろう。継次は腹を括らざるを得ない。

早々に水戸を発ち、府内へ入り、ひとまず清河八郎と面会する。手筈は整えてあるという。

清河にはまた別の思い入れがあるようだ。継次とは、一度面会しておきたいらしい。

平山五郎という播州浪人と、野口建司という若者が同行する。他に新見錦という者が数名を連れ、すでに入府しているという。

「どの者も、先生の手足となって働いてくれるでしょう。」

拳兵のことはまだ内密にしてある。野口も平山も詳しい事はまだ知らないでいる。

「先発の新見君にだけは、事の詳細を話してあります。」

膝を付き合わせて話してみたが、信頼のおける男だと小四郎は言う。長州との繋ぎ的役割を担ってもらうのだとも言つ。この青年は人を信じたがる癖があるようだ。

「そういえば、新見君もこの度ご赦免になった一人ですよ。先生と同じ細谷の獄に繋がれていたとか。なかなか考えのはつきりした人

で、僕は好きだな。」

継次の脳裏に、田中伊織の面影が過ぎった。新見錦とは田中伊織の事ではないのか。

「まさかな。」

もしそうなら、何か言つて寄越してきてもよさそうなものだった。

それだけ継次はこの男を可愛がつてきたつもりだ。

継次より先に捕縛されたことを聞き、逃がしてやれなかった自分の非力さを悔やんでいた。

外へ出る。冴えざえとした白い月が天空に浮いている。流れる空気が袖口から忍び込む。

継次の心は、高揚していた。頬を紅潮させて身震いするような話をする若者に、また夢の続きを見させてもらっている。この興奮を誰かに伝えたい。

「尽忠報国。今まさに国に報わんとす。時は来たれり。」

継次は、思わず月に向かつて叫んだ。

吐き出す白い息が体温の熱さを物語っていた。

すぐに江戸へ立つ日程が決まった。

「平間を連れて行け。」

それを聞くと、待つていたように父親の命令が下った。

「ふえ。」

継次は屁の鳴るような返事をした。

「いやあ、一人で充分ですよ。同行する者もおりますし。」

平間重助は、芹沢家の用人だ。表向きの雑事は、ほとんどこの男がこなしている。

「重助がいなければ、父上も兄上もお困りになるでしょう。」

できれば、連れて行きたくはない。できるだけ身軽で居たいのだ。

それに、四十をまわった人の良いこの男を家族から引き離し、時代の真っ直中に引きずり出すのは心苦しい。

それも、水戸より先に出たことのないこの男を　はるばる京まで連れ出すのは酷というものだろう。

律義なものだ。平間はそれを厭わない。そして継次を諭す。

「光幹様。私がお供すれば、外記様はご安心なのですよ。まだお体が本当ではないのですから。」

継次は溜め息をついた。がんじがらめではないか。沢山の人の思いが纏わりついて、しころを着込んでいるように肩が重い。

「足手纏いには、なりませんから。」

「重助はそれでよいのか。生中なことではないんだ。お前にもどんな難儀がかかるか知れんのだぞ。」

継次はなんとか諦めさせようと、言い聞かせるのに必死だ。しかし、重助は涼しい顔で継次の言葉を軽くいなしてゆく。

「命令には逆らえません。」

重助の主人は継次ではなく継次の父なのだ。頑固な男だ。継次はこの男が苦手だった。

「あれで良く気の付く男だ。以外と重宝するかも知れんな。」

しばらく側に置き、頃合を見計らって国許に返せばいいという兄の助言もあり、継次が折れた。

ほどなく、江戸へ発つ日が訪れた。

奈絵が仕上げた小紋の着物に袖を通す。

馬乗り袴に紋付きのぶっさき羽織。腰に大小の差料。懷に愛用の鉄線を忍ばせる。

手甲脚半を付けわらじを履き笠を持つと、誰にもひけをとらない立派な旅装束だ。奈絵が継次の首筋に衿巻きをそつと這わせた。

「まだ寒いですから、お風邪を召しませぬように。」

奈絵の気遣いが嬉しい。継次は

「ん。」

と短く答え奈絵の掌を握り締めた。

「俺は戦に出かけるのだ。戻って来るとは思うな。覚悟の別れだ。」

「行つて来る。」

奈絵は深々と頭をさげた。

「行つてらっしゃいませ。」

平間が、後はお任せをと言わんばかりに、振り向いて一礼した。

継次は振り向かない。歩幅をゆるめず歩いて行く。掌にユニコーンの根付けを握ったまま。

- 許せよ。奈絵。

文久三年一月も終わりに近い良く晴れた日。郷を冷たい風が吹き抜ける。指先が悴むほどの底冷えを感じながら、密命を抱いて四人の男が水戸を旅立った。

芹沢鴨三十四歳。平山五郎三十五歳。野口建司二十歳。そして平間重助四十歳。

第五章 寒夜（前書き）

いよいよ江戸で清河八郎と会う芹沢鴨。四人の結束もより強くかたまってゆく。

第五章 寒夜

ここ不忍池界隈は、出合い茶屋が軒を連ねる辺りとしては、名の知れた処だ。

まだ昼日中だというのに、天から降ってくる陽の光さえも、気恥ずかしげに道の端へ散ってゆく。

懷手に雪駄の音をたてて歩くと、着流しの裾が、落ち着きなく跳ね上がる。

擦れ違う女の白い足首に氣をとられると、女はそれを知ってか、鴨の視線をするりとかわし、俯いて足早に遠ざかって行った。

粹な縞の着物に天神鬚。下駄の音が小気味好く響いて、微かに情交の香りを零していった。

江戸ならではの女の風情だ。

女からしてみれば、鴨もまた、訳有り風の男に見えたに違いない。

鴨は、ふっと嘲笑った。

―よりによって、こんなところで清河八郎と逢引とは、おかしなものだ。

男女の逢瀬が韻美に重ねられる場所らしく、隠れるのにはちょうどいい。

政治向きの話も、秘めら事となると、とたんに韻美な趣を見せるものだ。密談などには、もってこいの場所なのかもしれない。

板塀の角を素早く曲がると、目指す茶屋の暖簾の奥へ鴨は融けるように消えた。

八郎は、店の奥の座敷で待っていた。

部屋の中は存外と暗い。光は、細い格子の隙から障子を透し、ようやく畳の目に届いていた。

「やっと会えましたな。」

八郎は、火鉢を抱えるようにして、掌を炙っていた。

熾された炭が、紅い炎の境界線で色分けされている。白く灰になった部分が、健全な黒を侵蝕していた。

「あの折りには、見事に振られてしまいました。」

文久元年二月一日のことを八郎は言っているのだ。天狗組の結党式が行われた次の日のことだから、鴨も覚えていた。

前日の興奮がまだ醒めない鴨は、技楼を訪ね面会を求めて来た八郎をつい袖にしまったのだった。

「あの時は、しこたま酒を飲み、酔いつぶれておりましたのでな。面目ないことです。」

鴨は耳の後ろを撫でた。嘘も方便だ。

「ところで、本気で天狗組を離れたわけではないでしょう。水府から何か含みおかれて、浪士組に参加されるとみました。違いますか。」

八郎は、掌をみつめたまま、鴨に問い掛けた。

「それならば、私からも尋ねましょう。清河先生は、よもや本気で將軍警護の為だけの浪士募集に、安易に乗られたわけではありませんまい。」

それを聞いて、八郎は肩をゆすつてククツと笑った。

「將軍警護の為だけです。他になにがあります。」

八郎がはぐらかす。

鴨は、膝を叩いて差料を手にしち上がろうとした。

「話しにならない。無駄なことは止めにしましょう。」

まだるっこしいやり取りは、鴨の性に合わない。こんな回りくどい男に、素直に腹の内など見せられない。

「芹沢君。」

八郎が声高に呼び止めた。八郎は、火箸で炭を追いやり、灰の上に幕という字を書いた。そしてそれを掻き消すように倒という字を上から書き、鴨の出方を待った。

鴨は片膝を着いたまま、火鉢の中を凝視した。そのまま八郎の顔を

見やり、ゆつくりと首を振った。

―早すぎる。まだその時期ではない。

八郎は察した。

「今すぐというわけではない。いずれはということです。」

八郎は全てを消し、もとあったように炭を置いた。

炭が炎に侵蝕されるように、鴨の頭の中が倒幕の二文字に侵蝕されていった。

鴨は、再び座り込んだ。右手の親指の爪を噛む。考えが纏まらない時の男の癖だ。

「何時かは、誰かがやらねばならない事です。」

八郎が言う。

もしかして、あの時小四郎が、拳兵の言葉の後に、言い淀んだのは倒幕の二文字だったのではないか。

ならば鴨と八郎の行き着く処は同じだ。

「芹沢君の活躍は聞き及んでおります。集めた金は、二万両とも三万両とも……。是非その力を貸して戴きたい。」

鴨は指を咥えたままだ。

「芹沢君。僕は君の後ろに控えている天狗組の行動力が、欲しいの

です。それに君達水戸勢には、浪士達を纏めて貰う心づもりでいます。天狗組玉造勢三百名をひっぱってきた君だ。お手の物でしょう。

「

鴨が顔をあげた。異論はない。もともと八郎すら欺くつもりで、参加する浪士組だ。行き着く先が同じならば、浪士組も八郎もそっくりそのまま天狗の手中に収める腹積もりで掛かっても良いのだ。

「よし。決めた。全てここに収めよう。」

鴨は右手で胸元を叩いた。

「安心した。大いにその手腕を発揮してくれたまえ。」

八郎の顔が見事に綻んだ。

「酒でもやりませんか。」

という八郎の誘いを断り、早々に切り上げて茶屋を出た。

鴨は酒を飲むと、質が悪くなるのを 自分でよく知っている。

酒が過ぎると絡む。荒れる。そんな醜態を早々と八郎に見せることは避けたかった。

茶屋の構えが、薄暮の中に沈んでいく。ますます鴨は訳有りの風体に身をやつし、そそくさと上野寛永寺の方向へと人々に紛れた。

宿へ戻ると、浅草あたりを見物してきてはしゃいでいる重助や建司

を尻目に、ごろりと横になった。

何故か気持ちが疲れていた。

「で、清河はどんな奴だった。」

五郎が率直に尋ねた。

「策士には違いない。なかなか油断ならん男だ。」

「油断ならんのは、先生も同じじゃないか。」

「そうだな。」

やけに素直なのに、五郎は鼻白んだ。

「なにを話してきた。俺達には隠し事ばかりだ。少しは手の内を話してくれたらどうだ。」

見物の話に花を咲かせていた重助と建司が、ばつが悪そうに押し黙った。五郎の口調に棘があるからだ。

「黙ってあんたに着いて行くには、それなりの覚悟がいる。特に俺はよそのものだからな。」

鉄扇を取り出し、開いて閉じる音が聞こえた。

「ぐずぐず言うのなら、ここから水戸なり姫路なりへとつとと帰れ。そんなことは水戸が出る前に、小四郎と話を詰めておくもんだ。馬鹿野郎。」

寝転んだまま、鴨は言葉を荒げた。しかし覇気がない。

倒幕という言葉に怯んでいるのは鴨の方だつ。

―こいつらをひっぱって行けるのか。

重助が五郎の袖を引っ張った。

「放つとけ。へたに突つ突くと、鉄扇が飛んでくるぞ。」

小声で言うのが五郎には届かない。

「重助。なにをぐちゃぐちゃ言ってるんだ。鉄扇がどうしたって。」

横にはなっているが、鴨の頭の中は、冬の乾いた空のように冴え渡っている。

悪言を吐きながら、大人気ないことだと思つ。

鴨は、自分に迷いがあるのを誰にも悟られなくなかつた。

天皇を擁しての挙兵は、あくまでも幕閣に攘夷を迫るための手段であるはずだ。倒幕までは思い及ばなかつた。

しかし幕府を倒してその後はどうする。薩摩か長州かそれとも土佐か。

外様雄藩の力と財力が必要不可欠だ。この浪士募集は、薩摩の島津久光や、土佐の山内容堂も一枚かんでいるという話だ。

あつて然るべき暴挙ともいえる。

―清河の野郎。それに小四郎。知つて俺を追ひ込みやがった。

鴨がむくりと起き上がった。すぐさま重助と建司がのけ反つて額を防御した。

五郎は一瞬にして三尺飛び退いた。片目が見えないぶんを、すばしこさが補っていた。

鴨は源心流の抜刀術も修めている。鉄扇の技は抜刀術の応用だ。

懷からひらめく鉄扇は、相手のこめかみ目掛けてようしゃなく飛んでいく。まともに受けたなら、命はない。

目の当たりにしたことはないが、鴨の正確な技を皆聞き及んでいるのだ。

鴨は、狐につままれたような顔をした。

「寒っ。」

と、身を震わせて立ち上がる。

「どこへ。」

「厠だ。」

皆、ほつと胸を撫で下ろし、笑いさざめきあつた。

濡縁の冷えた感触が、鴨の足の裏から這いずりあがってくる。

夜空は碧いのだが、見上げても、雲に阻まれ星ひとつ見えない。

その雲間から、落ちて来るものがある。

—ほう、雪か。

空の高みから落ちてきて、庭の苔の隙間の中へ溶けてゆく。積もらぬ雪だ。積もらなくても土に沁みて、命の源になる。

鴨は、濡縁から身を乗り出して掌に雪を受ける。雪のかけらは掌にゆっくり落ちて、体温に同化する。

溶け逝くものは土に沁みず、鴨の皮膚に沁みた。

唇でそれを舐める。なんとも優しい味がする。

深く息を吐く。

気持ち澄んで来る。

世の中には、考えても仕方のない事がある。時には成り行きに身を任せることも必要なのだ。

五郎の焦りも当然のことだ。命を掛ける思いが強いほど、それに値する正当な理由が欲しい。でなければ途中で息切れしてしまうだろう。

話さなければならない。

鴨は、厠で用をたす間に、どこまでを話すか考えた。いつそのこと
全て話してしまった方がいいのかもしれない。

疑心暗鬼が思いもよらない結果を招いてしまうこともある。

信頼を得るには、丸裸になるしかないだろう。

夕餉が運ばれ、皆で膳に向かう。

「小四郎からは、どこまで話があった。」

鴨が尋ねる。

「ただ先生の供をして上洛しろと。それだけですよね、平山さん。」

建司が飯をほうばりながら、五郎に同意をもとめる。

「藤田君からは、それしか聞いていない。しかし、噂は色々と耳に
入ってくる。」

五郎が、飯に熱い汁を掛け、それを掻き込む。

「噂とは」

出汁の張られた菊花豆腐の碗を左手に、鴨が再び五郎に尋ねる。箸
が止まったままだ。五郎は飯を飲み下す。

「拳兵ですよ。それも京と常陸で同時に。」

「平山さん。声が高いですよ。」

建司が諫める。

「なに、誰も耳をそばだててはおらんよ。」

鴨が話すまでもない。拳兵は周知の事実のようだ。

鴨が豆腐に箸をつけようとしたが、五郎がそれを遮った。

「聞きたいのは、その先だ。」

鴨は菊の花にみたてた豆腐に、箸を入れた。花びらが散り、山葵の緑が汁に碎けて溶けてゆく。

「倒幕。」

重助が思わず噎せた。五郎と建司が顔を見合わせ頷いた。

「清河からもそれを切り出された。」

「絡んでいるのは、薩摩ですか。」

五郎の頭には寺田屋の件が甦ってきた。

「わからんが、小四郎は長州との密約を当てにしているようだ。」

「長州ですか。」

五郎が、箸を置いた。

「芹沢先生。自藩だけでなんとかならないんですか。」

建司が口を挟んだ。建司は、歯痒いのだ。

「水戸もんばかりが、損な役回りをおしつけられているような気がしてならん。」

と言うと、空になった飯碗に茶を注いで飲み干した。

「損も得もないぞ、建司。命を張ってでもやらねばならんことがある。俺は今まで沢山の友を亡くしてきたが、誰一人の最期も犬死には思っていない。どれも大切な命だった。だからその骨を俺達が拾って行く。俺達が死んだら、後に続く者が骨を拾い意志を拾って先へ進む。そうやって事は成就してゆくのだ。一朝一夕にはいかんかといって無駄なこととは何もないのだ。」

建司が、吐き出した言葉を後悔して肩を落とした。重助が見兼ねて助け船を出す。

「光幹様。野口さんはまだ若いから、そう思うのも無理ありません。」

見ると五郎が、見えぬ目を潤ませている。恥ずかしげにそれを拳で拭った。

「とんだ醜態だな。」

五郎が照れ隠しに笑って見せた。

水戸まで流れてきたこの男にもそれなりの過去があるのだろう。

「建司。知らなくてもいいことがある。知らずに済めばそれに越したことはない。が、ここまできた以上は、覚悟を決めておかなければならんよ。」

鴨は、建司の顔を覗いた。出会った頃の伊織に若い悔しげな表情が重なる。

建司は、鴨の瞳の薄い茶色に吸い寄せられていた。

夜が更けてゆく。

掻卷にすっぽり身体を包んで、暖まった空気に眠気をゆだねながら、建司はうつらと夢を見ていた。

大きなうねりに吞まれそうになりながら、それでも何か哀しいほどの優しさに満ち足りている。

もし、鴨に命を棄てると言われれば、棄てても悔いは残らないだろう。やがて深い眠りに落ちた建司の微かな寝息が、鴨の耳元まで聞こえて来る。

「先生。眠れませんか」

五郎が気配で声をかけてきた。

「いや。そうでもない。」

暗闇の中で会話する。

「すみませんでした。訳もなく突っ掛かって。」

「いや、俺も大人気なかった。」

「でも、良かった。先生の腹の内がわかって。」

「安心するのは、早いぞ。俺は、案外と腹黒い。」

「本当に腹黒い人間は、自分からそんなことは言わないもんだ。」

鴨は、寝返りを打った。

細かい雪が霰になりぱらぱらと音をたてて通り過ぎて往く。

明日には立春を迎える。春といっても名ばかり、外気はしんとして凍り付くようだ。

夜が明けたら、早々に宿を引き払い、小石川にある伝通院に入る。そこで清河八郎と合流する。

霰の音が一瞬激しくなり、やがて遠のく。

その旋律に合わせて鴨の意識もゆっくり遠のいて行った。

第六章 試衛館（前書き）

いよいよ、近藤勇・土方歳三・沖田総司ら試衛館の面々が登場します。彼らなしには、何も語れない！

第六章 試衛館

江戸は、牛込甲羅屋敷内。天然理心流道場、試衛館。

塾頭の沖田総司は、多摩への出稽古から帰るやいなや、細長い食客部屋に稽古着を投げ込むと、道場主の近藤勇の書斎へ向かった。

これみよがしに足音を荒げ、部屋の前まで行くと、声もかけず襖を引き開けた。

勇が文机に向かい、懸命に筆を動かしている。

総司に背中を向けたまま、降り向きもしない。

「いつたい、いつまでそうやってるつもりなんだ。今日俺は、彦五郎さんに厭味を言われて、なんとも返答できずに帰ってきたんだぜ。」

高い声で罵り、力任せに襖戸を閉めた。

遠慮などかけらもない総司の態度だ。

足音が怒りを顕にして遠ざかる。

「くそつ。」

そんな声まで投げ付けられた。

勇は筆を置いて溜め息を吐いた。

総司が怒るのも無理はない。

ここ半年というもの、道場に顔も出さず、勇は日がなこうして書斎に籠り、日本外史の複写に没頭しているのだった。

勇には、忘れてしまいたい事があった。忘れようと努力しても忘れられない事があった。

出自が農民であるという動かしがたい事実を突き付けられ、とうとう身動きが取れなくなったのだ。

苦しい。考えると喉が詰まり、鼻の奥がきな臭くなってくる。

最初は物分かり良さに、理解者を装ってくれていた友人や門弟すら、ここ数ヶ月の内に少しずつ態度を変えていった。

道場を閉めるらしい。

そんな噂も立ち始めた。

いつそのこと学者にでもなろうか。勇が旧知の井上源三郎にふつと漏らしてしまったのが、他の門弟達に広まってしまったからだ。源三郎に悪気はない。勇のことは心配だった。しかし、あまりの堅くなさに、辟易しているのも事実だ。いい加減にしろと喉元まで出かかって、何度飲み込んだかしのれない。

短気な総司も、相手が勇だから、我慢に我慢を重ねての爆発だ。流暢に構えているのは、土方歳三ぐらいだった。

「好きなようにさせときゃあいいさ。そのうち気が済む。道場だつて潰れやあしねえよ。」

と噂話を一笑してしまうのだった。

幕府が新たに講武所を開設した。その教授になるという話が、立ち消えてしまった。それが始まりだ。

話は講武所の剣道教授見習いに内定という所まで進んでいた。士官の道も開け、順風満帆、前途洋々の勇の人生の筈だった。農民出身。勇の前に立ちはだかった家柄の相違だ。内定はあっさり取り消された。

勇の落胆は、端で見るのも可哀相なくらいだった。

そのまま、引き籠もりを決め込んでしまっているのは、よほどのことなのだ。

「つねさんよ。先生はどんな様子だい。」

勇の食事の膳を片付けている妻のつねに歳三は尋ねてみる。

「相変わらずです。」

つねはそう言つて、細い目の端で歳三をちらりと睨むと、せわしなげに奥へ入った。

その表情は、放っておいてくれとも、なんとかしてくれとも訴えているように見える。

「いったい俺にどうしろつてんだ。まったく。襟首ひつ掴んで、書斎から引き摺り出せてえのか。」

濡縁の柱によりかかり、歳三は腕組みしたまま顎を撫でた。

自分くらいは、勇を責めずに待っていてやってもいいだろう。もし道場を閉めると勇が決めたなら、それはそれでいい。

勇は今、独りで失望という崖っ淵から這い上がるかと必死なのだ。きつと、大人しく学問しているように見えて、内心ではのたうちまわっているに違いないのだ。

歳三はそう思いたかった。

稽古場では、総司が荒れている。

「歳さんはいいさ。薬屋つて家業がある。俺あ困る。道場閉められた日にゃあ、行く所なんかありやしねえ。今更他流に鞍替えなんかできやしねえしな。」

手拭を頭に巻きながら喋る。

総司は、他流から鞍替えして、食客に収まっている奴等が聞いたら、顔色を変えそうな事を平気で言う。

「聞かれて困る話じゃあねえや。あたりめえのことを言つて何が悪い。」

もし歳三が、たいいがいにしろよと諫めたなら、総司は多分こう言い返すだろう。分かっているから何も言わない。

「そしたらおめえが道場を開けばいいじゃねえか。兄貴に口利いてやつてもいいぜ。」

歳三がにやりと笑う。総司はそれが気に食わない。

「心にもねえこと言つてんじゃねえや。本当に先生のこと考えてんなら、何とかしてくれねえかな。いい加減苛してくるぜ。こつちがたまねえや。気の病に効く薬はねえのかよ。」

総司は白河藩脱藩の浪人だ。江戸詰め藩士の子だから江戸っ子の端くれには違いない。早口でまくしたてるのが怒っているように聞こえる。

面の紐をきつく結ぶと小手にするりと手をいれる。

「よっしゃ。」

防具を付け終わると、総司は立上がり、竹刀を左手で鳴らす。そして係り稽古をしている門人の前に立ちはだかった。

「おめえだよ。」

相手に緊張が走る。今日の餌食だ。聳えた肩から二の腕へ、さらに小手までがひとつに流れ、竹刀の先が下がり気味に相手を見据えている。

「さあ、こい。」

甲高い声が響く。

総司の癖のある賑やかな太刀捌きが、道場を駆け巡った。打ち込み擦り抜け、すぐさま踵をかえし、正眼に構える。相手が振り向いたときには、すでに打ち込める状態で迫って来ている。

相手の方が、先に息が上がる。

「やつ、やつ、やああ。」

鋭い掛声と共に、総司の右足が三度道場の床を鳴らした。

相手の喉元に三段突きが見事に入る。防具を付けているといつても、かなりの衝撃をくらい相手は、そのまま失神してしまった。

総司はそれを知らん顔で放っておく。そのまま次の相手を掴まえ、その前に立ちはだかっていた。

全てがこの調子なので、門弟達は皆総司の相手をするのを恐がった。

「おめえには、道場主は務まらねえな。器じゃあねえや。」

歳三は倒れた門弟の面を解いてやりながら、呆れるしかない。

総司には、人を慈しむという心が欠けている。心がないわけではないが、それを表す術を知らない。

家族の縁に希薄なこの男は、無条件に生温い愛情というものを感じることがないまま育っている。

受けたことのない愛情を他人に授けることはできないのだ。

「おうつ。やっているな。今日の餌食は何人だ。」

永倉新八が、どこかかとやってきた。新八は、先般幕府が募集した浪士組に参加するかどうか、皆の答えを待っていた。

「先生はどうだ。」

新八に尋ねられ、歳三は首を降った。

「もしかしたら士官の道だって開けるかもしれないのにな。いい機会だとおもうぜ。」

「新八、おめえはどうするよ。」

「先生が行かなくても俺は行くよ。いつまでもここに世話になってるわけにもいかないし。あんたこそどうする。」

新八に問われても、歳三は明確な展望を持てないでいた。行っても行かなくても、どちらでも良かった。

ただ義兄の彦五郎が、熱心に勧めた。そのせいか気分は随分と行くという方向へ傾いている。

將軍警固という報を聞いて、彦五郎は小躍りした。

義弟がその役目に預かり將軍様のお役に立つことは、ひいては佐藤家のそしてこの日野近在の誉れであると、歳三の義兄は考えていた。彦五郎の頭の中で歳三の浪士組参加は、すでに決まっているのだろう。

「俺も行くぜ。」

総司が断言した。

「面白れえや。」

総司の理由は簡単明瞭だった。駆け引きも、野心も何もない。今の生活に、ほんの少しの違和感と膨満感を持ち始めていた。

違う場所に身を置いて見たい。ただそれだけだ。

総司は若い。みぞおちの辺りから湧き上がって来る、得体の知れない感情を押さえきることが出来ないでいた。日野への出稽古は、内藤新宿から甲州道中を歩く。

最近気のせいかな、多摩川を吹き抜ける川風が、総司の背中を軽く押して往く。

違う風に吹かれてみないかと無責任に囁いて通り過ぎる。

「そうだな。それもいいかな。」

世の中は今までは違った方向へと進みつつある。

新八らが時折、口に唾を溜めて喋っている、尊皇だ攘夷だなどということは総司にはよく解らない。

しかし、そういう時局のことも、解らないでは済まないだろう。剣術以外に知らなければならぬことが、沢山待っているような気がした。

翌日のことだ。

「天の岩戸が開いたぜ。」

総司が飛んで来た。

勇が外出しようとしている。

「袴なんぞはいて、何処行こうってんだ。」

歳三が慌てて後を追う。勇の様子は、どうみても普通ではない。心ここに在らずの体だ。歳三の後を面白がって総司が追う。居合わせた食客達も、なんだなんだと後に続く。

着いた所は、浪士組取り扱に任命されている松平主悦の元だった。

「いやいやよくこられた。」

温和に迎える主悦の幕閣然とした、上品さが皆を圧倒した。

茶がだされ、勇は平たくなつて恐縮した。

総司はそれがおかしくて、笑いをこらえる肩が振える。

それを見咎めた歳三が、総司の横腹を肘で小突く。その歳三までが、にやついている。平身低頭の勇の姿があまりに滑稽で、自分の複雑になつていく気持ちをこまかすには、笑うしかないのだ。

主悦は、社交辞令を混ぜながら、それでも勇等に好意を示した。

浪士組の筆頭が策士で名を成す清河八郎だ。後に続くのは、八郎の息のかかった者。

それを追つて参加するのが、水戸の天狗崩れだ。

どれも獄から放たれた猛者、それも浪士組参加にあたって三奉行の評定を仰がなければならなかった者ばかりだ。

主悦は、この役目に重圧を感じていた。何も起こらない筈はない。何か重大事が起これば、引責は免れないだろう。目に見えている主悦には、自分の前に並んで座っている、試衛館道場の連中が、清廉潔白の徒に見えて頼もしく思えた。

「お役目は間違いなく、將軍様上洛の折りの警固でありましょうか。」

「そうです。すでに会津藩松平容保公が、御家中を率いて上洛され、市中警固にあたっておられます。私達は、將軍の親衛隊としてそれに続くことになります。皆さんが、こぞって参加してくださいれば、大変心強いですな。」

「拙者、そうおしゃっていただき、興越至極。痛み入ります。」
勇はますます平たくなった。

「痛み入りますか。今時珍しい。」

主悦は苦笑いした。

しかし、天狗崩れなどと比べたら扱い安い。

こういう連中が多ければそれに越したことはない。

重圧こそは無くならないが、主悦の気持ちが少しばかり軽くなった。こころなしか、寒さも和らぐ。

主悦には、いい日和だった。

雲の隙間から幾筋かの陽の光が、ただ真っ直ぐに地上めがけて差し込んでくる。

主悦は空を見上げ、呟いた。

「優しい光だ。」

その光は、勇の目にも届いていた。

光を見ているうちに、勇の中で渦を巻いていた様々な迷いが、一瞬のうちに拭い去られた。

「行こう。」

勇が力強く言った。

「えっ。」

歳三が聞き返す。

幕閣の主悦に頼りにしています等と言われ、勇は感極まっていた。頬が紅潮し、表情がうつてかわって晴れやかだ。

「豚もおだてりゃあ何とかだぜ。」

歳三が小声でぶつくさ言う。

「こりゃいいや、歳さん。先生は豚か。でもこれであっさりしたぜ。」

「総司がやけに嬉しそうだ。なんだかんだいっても、勇なしでは、話が始まらないのだ。」

「まあな。」

歳三は少し違う。なんとなく憂鬱を感じた。

これから準備が大変だ。

彦五郎の喜ぶ顔が目には浮かぶ。

試衛館では、道場主も塾頭も留守をすることになる。後のことは彦五郎にしっかり頼んでおかなければならない。

一番の支援者であり理解者である、彦五郎や多摩近在の有力者の機嫌を損ねてはならない。

まずは、そこら辺りの根回しから始めなければならない。歳三の頭は、すでに上洛の方向に切り替わっていた。素早い。

まだ時間はたっぷりある。

御府内を離れることになるなど思いもよらない事になった。

誰もが不安を抱き、それ以上の期待が、知らない内に不安を覆い隠していた。

いったい何が皆を脅かして行くのかなど、考えたくもなかった。

第七章 再会（前書き）

芹沢鴨。いよいよ浪士組として始動します。ここに、ふたつの再会が。新見錦。そして池田徳太郎。

第七章 再会

早朝の町の賑わいは、清々しい。通りの真ん中を弾むように転がって行く。

どの店も裏店に到るまで活気に満ち溢れ、そんな町の威勢よさが、鴨の腹の底から湧き上がって来る喜々とした感情を上げ底してゆく。できるだけ平静を装っている鴨や五郎に比べ、重助や健司は正直だ。徒に傍らをくすぐってゆく躍動感の眩しさに心を取られ、振り返りながら前へ進む。

「ほら、前を見て歩け。」

振り売りにぶつかりそうになった健司を鴨が諫める。

健司は首をすくめた。健司だけではない。四人ともが浮き足立っているのだ。

「しょうがないなあ。田舎物丸出した。」

そう言う五郎も珍しく楽しげだ。自然と頬が弛むらしい。

密命を携えているといっても、実感は湧かない。水戸を離れてしまうと、益々その緊張感が何処かへ拡散してしまう。

それで丁度いい。今から気を張り詰めて居ても仕方ない。

成る様にしかない。成さなければならぬ時は、道理を曲げてでも成す。

今迄鴨は、大概をそうやって切り抜けて来た。

そのせいで、粗暴な奴などと陰口を叩かれていることも知っている。

「言いたい奴には、言わせておけばいい。」

そう嘯いてみようにも、この度は随分と勝手が違う。間者として役に立つかどうか、鴨自身が不安を拭い切れないでいた。

押しの強さだけでは、くぐり抜けて行けない事もあるだろう。

それを考えると、高揚していた気持ちが一瞬萎えた。

「先生、ぼんやりしてないで早く。置いて行きますよ。」

今度は鴨が健司に叱咤される番だった。

「考えても仕方無い事は考えない。そうでしたよね。」

五郎が耳打ちした。この男は見えない方の目を眼帯で覆っている。どうにも蔵つい。けれど実は繊細な男だ。人の心の微妙な動きを即座に感じ取る。

言われて鴨は気を取り直し、背筋を伸ばした。広げた胸隔に、朝の鮮烈な空気が入り込む。

さすがに伝通院の門前辺りまで来ると、賑わいも一段落する。

それでも、普段は森閑としているはずの空気が、忙しない。

鴨ら以外にも、浪士組に参加しようとする者が、伝通院の山門を指して歩いて行く。

追い越してゆく者は、皆一応に鴨らを怪訝な顔で一瞥した。

「なんだか場違いな感じですね。紋付の羽織りなんて格好悪いですね。」

健司が恥ずかしがる。少し長めに仕立ててあるのが当世風だと言って若者らしい拘りを見せていたのが、すっかり興覚めしたようだ。

「気にするな。男は恰好じゃない。」

鴨が健司の無駄話を遮った。

「先生に言われたくないですよ。」

健司が頬を膨らませる。そういう鴨の身なりが一番良いからだ。

やがて四人は伝通院の山門をくぐり、塔頭処浄院大信寮へ入った。

「先生、あれを。」

鴨は重助に促され、その指差す方を見た。男がひとり、こちらの方に向かって深々と頭を下げている。重助にはそれが誰か判っているらしく、一段腰を落とし頭を下げた。

―伊織。

田中伊織に間違い無かった。名を新見錦と改めているのだから、錦と呼ぶべきなのだろう。鴨は思わず走り寄った。

「会えて良かった。」

喉元から絞り出した声が上顎にひっかかり掠れた。錦は頭を上げようとしな

「先生には申し訳が立ちません。俺が白状したばかりに、先生に追っ手が掛かってしまい・・・」

「何を言う。俺が捕縛されたのは必然というものだ。お前の責ではない。さっ、頭を上げてくれ。」

鴨は錦の肩を何度も揺さぶった。

「先生、痛いですよ。」

錦がようやく顔を上げた。顔付きが以前と変わらない事に鴨は安堵した。

両の手首に、捕縛され後ろ手に縛られた時の、縄紐の痕が残っている。痛々しい。

「先生も同じじゃないですか。」

錦が骨張った指で鴨の手首を握り締めた。同じような痕がその手首にも薄く残っている。

「俺だけが、特別な目に合ったと言っ訳ではないです。」

錦が俯く。

「獄で耐え抜いた誉れだ。そう思え。」

「はい。」

伊織が鼻を嚙りながら笑った。端正な顔立ちをしているのだが、歯並びの悪いせいか、笑うと微妙に唇が歪む。鴨にはそれがひどく懐かしい。愛すべき笑顔だ。

「俺達の中に割って入れない親密さだな。」

二人の様子をみながら五郎が言う。

「共に戦われた仲です。私らには、計り知れん感慨があるんでしよう。」

重助が涙ぐんで声を振るわせた。健司までもが目を潤ませている。

二人は貰い泣きを隠そうとしない。

「感情の起伏が激しい奴等だ。」

しばらく水戸に滞在して五郎はそう思う。

穏やかな内海で育った五郎とは、精神の持ち様が少し違う。

異なる風土で人格を形成してきた者達と深く関わるのは面白い。だ

から離れられない。しかし、どうやら再会を喜んでいるばかりではなさそうだ。

柔らかな表情の下にある錦の目が、ふっと笑いを取りこぼす。

「この先、桂先生との連絡役は、俺が務めます。このことは先生の胸にしっかりと収めておいて下さい。」

鴨は解ったと、錦の二の腕を軽く叩く。

「ところで住谷らとは、どうなっている。」

すでに住谷寅之介ら数名の激派藩士が、一ツ橋慶喜とともに入京している。

一ツ橋家で信頼の置ける家臣を未だ持たない慶喜が、実家から有能な藩士を借り受けたのだ。

住谷は浪士組編成に先立ち、その周旋役を務めた男だ。

彼らは、浪士組が尽忠報国の士として上洛することを薩長土など雄藩烈強の激派有士に、内々に先触れしているはずだ。

天狗組からその趣旨を納得している者が、数名入り込んで居ることも如実に知らしめておく必要があった。

幕府の徒になりさがったなどと無用な批判を浴びるのは、鴨らも心外である。その為に行動が阻害されるような事は、極力避けたい。

それだけでなく、この度の浪士組編成について、長州の桂小五郎が批判的であるという風聞が聞こえてきている。

もともと突出した行動派の清河八郎と、桂小五郎は気が合わないらしい。長州の急進派を唆する油断ならない奴だと、小五郎は感じていた。

鴨らが水戸を発った頃と時を同じくして、京ではこの急進派が集い意見の調整を行っていたのだった。

住谷らは宿舎である本国寺に逗留している。そして脱藩浪人という立場で天狗組の別動隊が入京して来るのを待っているのだ。

しかし。

鴨は錦に確かめておきたかった。

桂小五郎と清河八郎が相容れないのと同じように、藤田を総領とす

る天狗組と住谷一派はどこか相容れないところがある様な気がしてならないのだ。

ひとまず鴨は錦の案内で、浪士取締役の鵜殿鳩翁に挨拶を述べ、山岡鉄舟に頭を下げた。

機嫌が悪いのか鉄舟は仏頂面の会釈を返しただけでそっぽを向いた。鴨は面食らった。

「あまり気にされるな。」

奥から現れた清河八郎が肩を揺すって笑っている。

「いよいよ始まりますな。よろしく願いますよ。」

「なんなりと申し付けて下さい。訳の解らん輩の扱いには慣れていきますから。」

と鴨はざわついている周囲をぐるりと見渡した。

「よろしくお願い致します。なにせこんな調子ですから。」

聞き覚えのある声がした。見ると池田徳太郎の姿があった。

ほんのしばらくの間だったが、徳太郎とは小伝馬町の牢で一緒だった。

彼は八郎の腹心だ。八郎を逃がすため、八郎の妻や弟と共に、囚われの身となっていたのだった。

「おう、元気だったか。」

徳太郎はそれに頬笑んで頷いた。八郎に鴨ら水戸天狗組浪士を推挙したのは、あるいは徳太郎であるかもしれない。

「供に命長らえましたね。」

徳太郎が感慨深げに言った。

「後は、何時どのように捨てるかだ。惜しい命ではない。」

「芹沢さんらしい。しかし、人は死ぬるべき時が来たら死ぬるものです。」

徳太郎は澀んだ空を見上げた。

「だったら、俺の死ぬべき時は何時なんだろうねえ、徳さん。俺は命の落とし所を見失っているように思えてならんよ。」

「あなたにしては、気弱なことだ。」

鴨も空を見上げた。先に逝った者達が、生き残った者の有り様を見下ろしているようだ。

「さあ、芹沢さんの腕の見せ所ですよ。期待してます。」

八郎はともかく、徳太郎の期待には是が非でも応えなければならぬ。徳太郎とはそういう仲だ。

幕府の役人や清河勢は、右往左往している魑魅魍魎もどきの連中に手を嫉いて居た。

侍から縛徒に至るまで、一癖ある輩ばかりだ。へたをすれば一触即発は免れない。

鴨を始めとする水戸勢は水を得た魚のように働き始めた。

健司が恥ずかしがった紋付き羽織りが、ここぞと物を言う。身なりの良さが圧倒的に他の追隨を許さない。

触れ込みは天狗崩れだ。それを聞いて志を持つ者はたじろいだ。

「あれが名高い水戸の天狗か。」

囁く声が潮のように寄せて来る。その天狗が一段高い所から声を発した。

「浪士組に志願する者は、ここへ整然と並ばれよ。出自と姓名を名乗られたし。」

腹に響くよく通る声に皆が静まった。

長身の鴨が聳え立つ。その手前に錦が眉をあげて立ちはだかり、眼帯の五郎が口を屁の字に曲げて腕組みしている。

重助が気をきかせて文机をあるだけ用意させた。俄か受付けがあつと言つ間にできあがつた。

幕府側は、誤算していた。五十人も集まれば良しと思っていた。人数はすでにその三倍を超えている。

純粋に尽忠報国を唱える浪士。一人五両の支度金に釣られて参加する縛徒。新天地を求める食い詰め浪人。腕を試し名を馳せたい農民町民。様々な理由が境内に渦を巻いている。

浪士取締扱いの松平主悦が突然体調を崩した。胃の痛みと吐き気を訴えたのだ。

この有様を見て緊張の度合いが高まったせいだ。

募集人員は無制限。篩にかけようと提案したが、八郎や鉄舟が譲らない。まるまる私兵にするつもりなのだから、人数は多い方がいいに決まっていた。

鴨はそのやりとりを背中中で聞きながら、面倒な事だと内心思った。

有象無象の衆は舵取りを謝ると暴走と化す。得に行動の基盤に明確な指針が無い者達へ、秩序を与えるのは難しい。

天狗組ですら、一枚岩というわけにはいかなかった。集団から大きく逸脱する者が必ず現れ、面倒を起こす。

おそらくそれも承知の八郎だ。鴨に何とか収めろという腹積もりなのは判っていた。

「足並みが揃わないのは、奴らの方だな。」

鴨がふつと鼻先で笑う。その独り言に、錦が相槌を打った。

「全く。どう収めるつもりなんだか。清河先生もいい気なもんだ。」

「まあ、仕方がないか。」

幕府側の人間と八郎の間には、もともと隔たりがあるのだ。

足並みが揃わないといえば、

「住谷と藤田の歩調は、どうなんだ。」

「それは……。藤田君の上洛を待つて、話を詰めます。」

錦が言い淀んだ。

「そうか。まだ煮詰まっていないか。迂闊には動けんということだな。」

鴨はそれに気付かない振りをして話をそらした。

「で、粕谷がどうして浪士組に。」

天狗組から分裂し、薩摩藩の庇護をつけようとした連中のひとり、

粕谷新五郎の姿が見え気になっていた。

天狗組の中の保守派といって良いだろう。気に食わない奴等だ。

「奴等も上洛します。ただし長州の手を借りるようです。粕谷は長州の伊東俊輔から、ここへ潜入を命じられています。その背後には久坂玄瑞の姿が見えます。」

「そのまた後ろに高杉晋作か。長州もえらい念の入れようだな。」

「長州も藩の命運がかかっていますからね。とにかく、俺は桂先生の指示下で動きます。先生はしばらく天狗崩れでいて下さい。」

「俺は口を拭って居るということか。」

「そういう事です。」

錦がにやりと笑った。

その夜、鴨らは僧坊に寢床をとった。水戸藩邸は小石川にあるのだが、身分上そこへは入れない。

皆はすでに夜着を纏い、軽い寝息をたてていた。

鴨の後ろでは錦が眠っている。なにか様子がおかしい。どうやらうなされているようだ。

揺り起こそうとしたと同時に、あつと声を上げて飛び起きた。明らかに何かに怯えている。荒い息が鴨の耳元に届く。

「大丈夫か。」

暗闇の中に鴨の声を認め、過去へ浮遊していた錦の意識が戻って来た。

「大丈夫です。」

錦は右の掌で額を覆った。そしてそのまま顔を撫でた。

うなされる理由。獄中で何があつたかなど、察するに余りある。

うなされては目覚める。鴨でさえその責めから逃れる事は出来なかった。悪夢から解放されたのは、つい先頃の事だ。

そうだ。錦はまだ、あの獄に潜む得体の知れない闇の中にいる。そこから自力で抜け出すしかない。

錦の顔が闇の中で歪んだ。

第八章 出立（前書き）

いよいよ京へ出立です。鴨ら水戸派と試衛館の面々がようやく顔を
会わせます。

第八章 出立

錦の悪夢は、夜毎彼の神経を苛んでいた。

「出ませい。」

の声に、今まさに牢から解き放たれようとしている。

悪夢の始まりは、いつもここからだ。

暗い牢の向こうには俗世への入口が開いている。光が眩い。

誰かの影が早く来いと手招きしているように見える。誰かは定かではないのだが、その輪郭に懐かしさを禁じ得ない。

思わず光の中へ踏み出そうとすると、光がほんの僅かに遠のく。何度もそれを繰り返す。

――早く来ないか。

光の中から声がする。しかし、一向に外へ出られない。不安がよぎる。

まるでその瞬間を狙っていたかのように、亡者の蒼白い手が錦の足首を掴む。抗えないほどの強い力が彼を引き倒し、再び闇の中へ引きずり込もうとするのだ。

いつもそこで目覚める。悪夢を振りほどくように目を覚ます。この寒さだというのに額に脂汗が滲んでいる。その汗を拭う。

いつかこの悪夢から解き放たれる日が来るだろうか。しかしその日を手をこまねいて待つてなどいられない。

錦は辺りを見回した。闇は僧坊の隅に溶け込んでさらなる闇を創り出す。この深い漆黒の闇の中に背中を丸めて潜んでいる亡者を

今にこの手で白日の下に曝してやろうじゃないか。

翌日には試衛館から近藤勇らが合流した。

勇は山岡鉄舟とすでに面会を済ませていた。旧知だからという訳ではない。講武所教授見習い内定がお流れになった件が絡んでいた。

鉄舟が温情をかけたのだ。

この浪士組編成を提言した松平主税は講武所剣術教授方であり、彼を看板に祭り上げている鉄舟も講武所の人間である。あの一件では勇に同情していた。

「待っていましたよ。やっと来られましたな。」

「いや大勢の人ですね。思いもありませんでした。」

いたって機嫌よく応対する鉄舟に、水戸勢は眉を顰めた。

「えらい対応の差だな。役に立っているのは俺達の方なのに。」

健司が鼻の穴を膨らませて言う。

「止めておけ。そんなことで肩を張っていても一文の得にもならんぞ。さあ持ち場へ散った、散った。」

鴨が一喝した。

人数は膨れ上がって三百名にも及んでいる。無駄話などしている暇はない。

「ところで、あの方達はどちらかの御家中で。」

勇は鴨らがすでに幕臣に混じって立ち働いているのを目敏く見付け、鉄舟に尋ねた。

「どうも目付きが尋常ではないように見受けますが。」

「さすが近藤さん、判りますか。あれは水戸の天狗崩れですよ。暫首を免れないところを清河君の肝煎りで、赦免になった奴等ですよ。」

「水戸の天狗……。桜田門外で大老を襲った奴等ですか。」

「その一派です。考え方の相違とやらで本隊とは袂を分かったという触れ込みです。が、さてどうやら。」

鉄舟が彼等に余り良い感情を抱いていないのが、言葉の端々から感じてとれる。

視線を感じたのか、一番体躯の良い男が振り向いた。勇が初めて鴨と出会った瞬間だった。その時二人は軽く会釈を交わした。

その頃、鴨に持ち場へ戻れと言われ、境内を横切ろうとした健司は、若い侍とぶつかってしまった。

「つつ。」

健司の刀の柄が、男の腰骨に当たり、男は顔を歪めた。

「これは申し訳ありません。お許し下さい。」

面倒は避けたかったので、健司は下手に出た。

そのまま過ぎようとしたが、健司の態度がぞんざいに見えた男はそれを許さなかった。

男が眉間に皺を寄せ健司の肩を掴んだ。

「そっちからぶつかっておいで、そりゃあねえだろうが。」

「だから謝ったではないか。」

健司が気色ばむ。二人が睨み合う。

「総司、やめねえか。下らないことで争ってんじゃねえ。」

すらりとした姿の良い男が中に割って入った。歳三だ。そして、もうひとりの男は総司。総司は仕方なく掴んだ健司の肩を乱暴に放した。

「どうした健司。持ち場へ戻れ。」

錦が揉め事の雰囲気を察し、健司に助け船を出した。

「何か無礼が有りましたら、私に免じてお許し下さい。私は水戸浪人新見錦と申します。この者は、同じく野口健司。この度は、ご苦勞様です。」

頭を下げる錦に促され、健司も仕方なく頭を下げた。そうまで下手に出られては、これ以上因縁の付けようがない。

「こちらこそ無礼をいたしました。試衛館道場から参りました土方歳三と申します。よろしくお願い致します。」

歳三も頭を下げた。それが筋というものだ。しかし、総司は口を尖らせ顎を上げたまま。向こうの方が一枚上手だと思う。

「ガキじゃあるめえし、たいがいになよ。短気はいけねえ。」

「俺には、あんたみたいに器用な真似はできねえな。なあ薬屋さんよ。」

総司の毒舌には慣れっこだが、時には許容の範囲を超えることがある。

―しめえにぶつちめるぞ。

腸が煮えくり返りそうになるのを　臍に力を入れてぐつと抑える。

「あれが水戸の天狗だそうだ。筋金入りはさすが違う。」

新八が素早く情報を仕入れて来た。話には聞いていたが、そういう奴等と行動を共にできるとは、面白いことになった。それだけでも来た甲斐がある。歳三は錦の後ろ姿をじっとみつめた。

いよいよ京へ向かつて出立の日だ。浪士に配られる支度金は一人二両に引き下げられた。

それでも二百四十人あまりが、そろって出立する運びとなった。

松平主税は罷免され、浪士取締扱いには、鵜殿鳩翁が任じられた。

そして浪士には二人扶持十両が与えられることになった。これで取りあえず烏合の衆に幕臣としての体裁が整った。

勇は池田徳太郎に就き先番宿割り役として、未だ明けやらぬ江戸の町を旅立った。

「松平殿はどうされましたか。」

足早に歩きながら勇が徳太郎に尋ねる。

「罷免されました。幕閣から詰め of 甘さをつつかれたのでしょうか。」

「そうですね。」

勇は主税の下で働くのを楽しみにしていた。大きく当てが外れて落胆した。

「天狗崩れとやらが幅を利かせているように見えますが。」

「あの人は、集団を扱うのに慣れていますからね。芹沢さんなどは、三百人の人間をその配下に置かれていたそうです。」

「せりざわ・・・。」

「山岡先生と同じくらい体の大きい人が居たでしょう。あれが芹沢鴨。」

「鴨。また妙な名前だ。」

「いやいや、鵜殿先生が鳩ですからね。鴨もありでしょうな。豪放磊落といえますか。気性は荒いですが、なかなかの人物ですよ。」

徳太郎がやけに褒めるので、勇は鼻白んだ。

「水戸には気性の激しい人が多い。藩風でしょうね。尊王思想も子供の頃から染み付いている。我々などは足許にも及びません。」

徳太郎は愉快そうに高い声で笑った。

「ずいぶんと御詳しい。」

「小伝馬町の牢で、しばらく一緒にいたからね。」

「池田殿は、またどうして牢などに。」

「清河先生の一件に連座したまでのことです。」

徳太郎は厳しい経験をさも簡単なことのように言つてのける。

天狗崩れの連中もつい最近まで獄に繋がれていたという話だが、そんなことがあつたかという働きぶりだ。

それに比べ、自分は時代に取り残されている。

勇は舌の奥の味噌に広がる苦味を帯びた唾を飲み下した。

「なあに、入牢していたからといって、それが偉いと言う訳ではありませんよ。そんな経験など無い方がいいに決まっている。」

徳太郎は勇の焦りに似た気持ちを察して言つた。

すでに時代は濁流となり眼前に横たわっている。勇はようやく岸边に立ち、泳ぎ始めた者達に続こうとしているのだ。

「まあ焦らないことです。それより近藤さん、宿割りの仕事も侮れませんよ。なんせ二百四十人の大所帯ですからね。」

飲み下した苦味が勇の胃の中に溜まってゆく。それとは対照的に徳太郎は、芽吹こうとしている春を僅かに萌え出る緑から拾い集めているように楽しげだ。

徳太郎は道すがら故郷の話語つて聞かせる。

彼は瀬戸内に浮かぶ生口島に生まれたという。

故郷の波打ち際に迫る段段畑。そこにたわわに実る蜜柑の橙色。吹く風に乗る鼻先に届く潮の香。輝く海に漕ぎ出す伝馬船の帆影。遠

い西国の穏やかな風景を軽やかに伝える。

お喋りに紛れていつの間にか歩が進んでいるのに、勇は驚かされる。それにしてもこの男、凡庸に見えるが、各地で学問を修養し私塾まで開いていた。それを投げ打って、昌平坂学問所へ入り、さらに学問を修めた英才だ。しかもそれをおくびにも出さず、宿割り役などに甘んじているのが、勇には解せない。

「人には向き不向きということがあります。」

徳太郎は言う。この男には野心の片鱗も見とれない。

「久しぶりに島の話をしていたら、干し蛸で一杯やりたくなりましたよ。これを炙って食うとまた美味いんですよ。」

徳太郎は笑いながらずんずん先を歩いて行くのだった。

ようやく空が白み始めた。朝露に湿った空気が大気の底に滞っている。二百四十人の浪士達は旅仕度を整え整列した。

芹沢鴨、新見錦。共に三番隊小頭を務める。

粕谷新五郎が取締役付きだというのに、なぜ鴨が三番隊小頭なんだ。錦が不満の意を表したが、鴨がそれを喉元で修めさせた。

処静院の境内に点呼の声が響き渡る。

「私、芹沢鴨。三番隊小頭を務めます。よろしくお願い致します。」
鴨がゆっくり頭を下げる。それではよろしいかと言わんばかりに、皆を嘗めるように見渡した。

伍隊は十名一組。鴨の下には、五郎、重助、健司はもとより、試衛館から参加した山南敬介、永倉新八、藤堂平助、土方歳三、沖田総司、原田佐之介が配された。

少しは名の知れた天狗崩れの配下に組みされるとは、身の締まる思いがする。特に敬介や新八ら時勢に聡い者達にとっては、願ってもない人事だ。体内を駆け廻る血が、沸き立つようだ。そして歳三は、じつと錦を見ていた。

しっかりと伸びた背筋。強いまなざし。彼の抱え込む闇の世界など

知る由も無い歳三は、その背中に存在する意志が何者であるか知りたいと思う。

錦が振り向きざまに歳三の視線を捕らまえ、唇からこぼれた笑みを返してよこした。

―あの男と俺とどこが違う。

歳三は手のひらに折り込んだ親指を握り締めた。

「それでは三番隊芹沢組、出立致します。」

吐く息も白く、草鞋がざわりと土を踏み締める。歩き始める音が重なり合い、木々の梢を振寄せた。山の端にたなびく鈍色の雲に、昇り始めた太陽の光が映え、銀色に輝きはじめる。それぞれが別の想いを抱き空を仰ぐ。美しい朝空の風情に胸がすくようだ。

目指すは今を時めく京の都。足取りも軽く心逸らせ、浪士達は意気揚々と中山道へ分け入った。

第九章 本庄篝火

鴨は目を閉じたまま、身動きもせず座っていた。生木が爆ぜて小さな音をたてる。その度に火の粉が飛び散り炎の先端を彩ってゆく。春の宵の冷えた空気が炎に暖められ、空間にわずかな風が起る。風が動き、炎が轟と鳴る。

鴨の透き通るように白い頬が揺れ動く炎に照らし出され、なまめいた女の肌のように見えた。

不思議な男だと五郎は思う。修羅のように激しいと思えば、次の瞬間には幼子のように無心で、捕らえどころがない。五郎は鴨の後ろで、この成り行きをじっと見つめていた。

上州本庄宿。江戸より二十一里十四丁。中山道はここで下仁田越えへと道が別れる。真っ直ぐ行く人、道をそれる人、合流する人で宿は活気に満ち溢れていた。

とつぷりと陽が暮れ、往来のど真ん中には、燃え上がる炎の塊と黒山の人ばかり。この宿で前代未聞の騒ぎを起した張本人は芹沢鴨。この男だ。

発端は宿割役が芹沢組の宿割り忘却したことにある。

鴻巣を出立し九里三十三丁の道中を歩き詰め、芹沢組はようやく本庄宿へ入った。皆が安堵の表情を見せる。

「今日はよく歩いたなあ。」

「なあに、これからはこんなもんさ。」

「早く湯へ入って、飯にありつきてえな。」

芹沢組の連中の口をついて出てくるのは、湯と飯の話ばかりだ。もうすでに体は宿の座敷に寝そべり、伸びをしているらしい。

しかし一向に宿へ入れない。いったいどうなっているんだと鴨が苛つく。苛ついているのは鴨だけではない。試衛館の連中も同じだ。こうしているうちにも、歩き詰めて汗ばんだ体から体温がじんわりと奪われてゆく。

「まだかよ。寒いぜ。」

両腕を抱え身を縮めて訴える奴もいる。腹が空いていればなおさら寒気が身に沁みる。

鴨は腕を組んだまま、地面を右足の爪先でなぞっていた。重助は予感がした。良からぬ事を考えているに違いない。

芹沢家の用人という平間家代々の職を継ぐため、十一の歳から芹沢家に仕えてきた重助だ。鴨の扱いには慣れていた。おおかたの事は仕草で察しがつく。何かしでかす前に、鴨はゆっくりと助走する。

いきなり暴れたりはいしないのだ。いいかやるぞ。着いて来るか逃げるかは、お前らの判断に任せる。そういう合図なのだ。

やがて鴨は顔を上げ、一言吠えた。

「火を焚け。野営をいたすぞ。」

鴨は宿が決まるのを指をくわえて待っているつもりはない。

――始まったな。久しぶりだ。玄太様の悪戯に付き合うのは。

つい懐かしい幼名が重助の頭をよぎる。悪戯の後始末は、いつも重助の仕事だった。鴨が重助に目配せをする。いつでも火を消せる様にしておけということだ。重助は頷いた。懐かしい。また鴨こうして居られる。重助は嬉しかった。

鴨は考えていた。とにかく暖をとらなければ。このままでは芹沢組は一同風邪を引いてしまう。それは避けたい。

明日には松井田の宿へ入る。その目前に横川の関。そして名だたる分水嶺、碓氷峠が控えている。和宮降下の折りに峻設工事が施され、多少なりとも越え易くなったとは言え、難所のひとつには違いない。一同揃って無事越えて行かねばならない。

中山道は東海道と違い、大きな河川に阻まれることはない。川止めなどで余計な路銀と日数がかかる心配はない。これは公務だ。遊山ならば一月程かける所を十六日で踏破する。

碓氷峠を越えると、浅間山を右手に臨みながら信州佐久軽井沢、追分と歩く。その先には中山道最大の難所、和田峠が控えている。

そして塩尻からは山深い木曾路へ入る。木曾路はまだ雪の中だろう。

ひとりの落伍者もなく、無事京へと連れて行く。それが頭としての勤めだ。

五郎が鴨の左肩を軽く叩いた。鴨は、はっと目を開いた。びっくりと動いた背中を訝しんで五郎が尋ねた。

「いったいどうしたんです。」

どうやら意識が途切れていたようだ。そのわずかな間に夢を見ていた。殺される夢だ。痛みが背中を突き抜けた。そして血の滴る生々しい感触が首筋を這う。思わず拭ってしまい掌を確かめる。炎が映り込んで朱い。

「そんなことは、気に病まれんことだ。」

「そうだな。」

たかが夢だ。弱気になどなってはいられない。

「それより、どう収めるつもりですか。これ。」

五郎がこの有様を顎でしゃくって言う。皆が面白がって焚付けを投げ込むので、炎は思いのほか大きくなっていった。

「火を消す手筈は、重助に任せてある。しばらく好きなようにさせておけ。」

こんなことぐらいで動じる鴨ではない。

「心配無用だ。」

いつもの豪傑がそこに居た。しかしついさっき垣間見た、鴨の迷い子のように頼りなげな表情は、いったいなんだ。五郎は肉付きのよい鴨の肩に手を置いたまま、同じ炎をみつめながら模索していた。

やがて野次馬の中から、宿役人が転がり出てきた。

「いったいどういうことだ。火が軒に移って火事にでもなったらどうなさるおつもりか。早々に火を消されよ。」

声がうわずっている。緊張のあまり語尾が裏返し、見えていて気の毒なほどだ。宿役人の言っている事は正しい。だが鴨はうるさいと言わんばかりに彼を睨みつけ、ぬっと立ち上がった。

「言われんでも、分かっておるわ。」

高い所から、声が降ってくる。思わぬ身の丈に恐れを為した宿役人

は後退りし、刀の柄に手を掛けた。

その瞬間だ。鴨は懷の鉄扇を握りしめ、そのまま抜き取り振り上げる。こめかみのあたりで手首を返すと、鉄扇が空を切って翻る。右足を一步踏み込むと同時に手首を絞る。

宿役人は観念して強く目を閉じた。鉄扇の要が宿役人のこめかみへ届く寸分前のところでぴたりと止まった。

振り切ってしまったていたら、間違いなく額の骨が粉々に砕けただろう。

「命びろいをしたな。」

鴨が体を傾け役人に耳打ちした。最初からそのつもりはない。少し脅かしてみただけだ。ざわついていた野次馬達も一斉に黙り込み、炎の燃え盛る音がひときわ大きく聞こえてくる。

宿役人がへたりこんだ所へ、徳太郎が忙しなく走って来た。

「申し訳ない、申し訳ない。どうにか宿を都合しました。さあ入って下さい。それにしても派手にやりましたね。」

「徳さん。あんたが悪い。待ちきれなくて、こんなことになってしまったぞ。」

鴨は徳太郎にこのような暴挙に到った言い訳をするのに余念がない。「風邪でも引いたら困るだろう。俺にも責任というものがあつてな……。」

「はい、その通りです。私が悪い。」

徳太郎が鴨を宥める。鴨はまるで恋人にむかつて拗ねている若い女のようにだ。五郎や重助は、火を消しながらおかしくて仕方ない。

「先に行つてゐるぞ。火を消すだけでいい。早く宿に入って飯を食え。」

鴨は、徳太郎の後ろで畏まっている勇の肩を軽く叩いた。

宿の手配を誤つたのは勇だった。それを分かっている、鴨も徳太郎も一言も勇を責めない。その寛容さがかえって勇には重い。

歳三が舌打ちした。

「皆いい気なもんだな。」

炎の向こう側にちらつく鴨の姿を観察していた歳三は、彼が傍若無人に見えて、実は人の心理を巧みに利用し皆を自分の意志の方向へ引き付けようとしている事に気付いていた。

もちろん計算しているわけではないのだろう。あの男は感覚でそれを計っている。

「どういうことだ。」

「歩き詰めで、道中がなじがらめだ。酒も女もやらねえとあっちゃあ、溜まるもんもあるだろうが。」

「そうだな。寄せ集めの猛者ばかりだ。いつ何があってもおかしくはない。」

勇はそれでも歳三が機嫌を損ねている訳が分からない。

「この騒動で、俺達はみごとに気を抜かれちまっている。」

それに、鴨はこれですます名を上げた。どうやら天狗崩れというだけでは足りないらしい。

芹沢鴨恐るべし。多分この意識は皆の頭に張り付いて離れないだろう。歳三はそれが気にいらぬ。

勇が試衛館の連中と離れている隙間を狙って奴等が忍び込んでくる。永倉新八は鴨と剣術の同門だ。それだけで舞い上がっている。山南敬介や藤堂平助の頭の中は、すでに尊皇攘夷の色にきれいに塗り込められてしまっているように見える。

「あんたもあいつらみたいに、芹沢の懷に潜り込みたいんじゃないのか。それができねえからふてくされてやがる。」

図星だ。歳三は顔色を変え、手にしていた半分焼け焦げた材木を地面に叩き付けた。

「口にしていいことと悪いことの区別がつかねえかよ。」

吐き捨てるように言う総司に背を向け行ってしまった。

「何様だつてんだ。ばかばかしい。ほんとのことを言われて怒つてやがる。」

「何をぶつくさ言ってるんです。」

建司が声をかけた。

「なんだ。あんたか。」

伝通院でのいざこざがなんとなく後を引いて、言葉を交わすのはあれ以来だ。

「芹沢さんつてのは、いつもああなのか。」

「さあ、俺もあんなの見るのは初めてだ。話はいろいろ聞いているが…。驚いたな。」

「でも、すげえな。面白えだろう。ああいう人と一緒なら。」

「面白いか。あんたも変わったことを言うな。」

あの人はただ一生懸命なだけだ。建司が言う。

「あんたは、どうなんだ。頭の中は尊皇攘夷だらけか。」

建司は総司と同年だ。何を考えているのか知りたい。建司がくすくす笑いだした。

「そんな訳ないでしょう。」

「そうか。安心した。でも、そのために命をかけたりはするのか。」

「尊皇攘夷の為に死ねるかと言われれば、良く分からないな。ただあの人の為には死ねますよ。」

「芹沢さんのためにか。」

「そうです。」

「わかんねえな。そういうの…。」

総司は呟いた。にこにこ笑って誰かのために死ねると言える神経が総司には理解できない。

俺は近藤勇のために死ねるか。総司は首を振った。まだ誰のためにも、何のためにも死ねない。死にたくない。まだ自分自身が何者かさえ解らないのに。

静かになった往来には、材木の焼け焦げた匂いが充満していた。

宿の二階の窓に寄り掛かり、若い浪士がひとり、この光景を眺めていた。

「芹沢鴨か。兄上、ついて行くならあの男だな。」

男は目を輝かせる。

「千松。いい加減にしろよ。さっきまでは、清河先生は男の中の男

だと言っていた、その舌の根の乾かん内になんだ。恥を知れ。」

千松と呼ばれた若者がにやりと笑った。

「俺の存在自体が、すでに兄上の恥ではないんですか。」

「馬鹿をいえ。それならここまで連れては来ない。ただ、こんな状況だ。身を慎め。」

事の顛末を見届けた千松は、静かに障子を閉めた。なにげない兄弟の会話が、閉じられた障子の内側に溶けていった。

第十章 女隊士

中沢良之介は、幕府の浪士組募集の知らせを聞き、上野国より心を逸らせ、江戸へと馳せ参じた一人だった。

父親は法神流の道場を開き、良之介も腕に覚えはなみなみとある。ここで名を挙げ、幕府の為に働こうという意気込みだった。

鼻の穴をふくらませ、伝通院へ入る。そこで鴨ら水戸派の勇姿に圧倒された。あれが名だたる天狗崩れかと、その迫力に口許がふさがらない。

「涎が垂れそうな顔だな。だらしない。もう少しちゃんとしないか」

聞いたことのある声だ。嫌な予感がする。良之介はおそろおそろ振り向いた。間違いなかった。妹の琴がにやりと笑って立っているのだ。

良之介の溜め息が笛のように鳴った。琴が男のなりをしているのはいつもの事だ。見慣れてはいる。腕も男には引けを取らない。上背も五尺七寸と見事だし、仕草だって男そのものだ。そんな事に今更驚きはしない。

しかし、髪を銀杏に結っているのには、さすがに参った。髪を切ってしまうとは、どうやら本気らしい。

「浪士組に参加するつもりか」

良之介は琴に小声で尋ねた。

「あたりまえだ。長沢千松と名乗った。よろしく頼むな。なに、髪などはいつでも伸びる。それから、十七だからな。十七」

まったく。十もさばをよんで、図々しい。良之介は、鼻白んだ。

「何があっても知らんぞ」

良之介は、言い捨てた。妹はかわいいが、構ってなどいられない。

「そんな事は、百も承知だ。自分の身は自分で守る。それにこの歳で貞操もへったくれもあるものか。それくらいの覚悟はある」

「そうは言っても、湯やら、着替えやら、どうするんだ」

「心配するな。ばれたら、開き直るまでだ」

琴は鼻に皺を寄せた。

「あの芹沢という男が見逃してくれた。いざという時には、あの男に頼む」

そういうわけにもいかんだろう。故郷^{くに}でおとなしくしていればいいものを。良之介は小さく舌打ちした。

長沢千松と名乗る男が、実は女だと錦が気付いた。感の良い男だ。

「女が紛れている。六番隊の長沢千松」

鴨に耳打ちした。

「だからなんだというんだ」

鴨が平然と言う。

「やっぱり先生だったか。悪戯が過ぎるんじゃないですか」

「いいではないか。女が国事に参加してはならんということは無い」

「それはそうだが、面倒が起こっては困る」

鴨はむきになる錦をからかってみたくなった。

「気になるか。どうだ千松に惚れたか」

「先生、女というそれしかないんですか」

錦は憮然としたが、頬を紅潮させている。この手の話はからきし駄目だ。だから、鴨はよけいにちよっかいを出したくなる。

「お前は堅い事も、柔らかい事も、くそ真面目でいかな。息がつまりぞ。肩の力を抜かんか」

「俺は先生の事を心配しているんだ。本庄の件で、山岡さんにゴネられたばかりじゃないか」

「おう、そんな事もあったか」

鴨は、しらばつくれた。内心やり過ぎたとは思っている。三番隊の

組頭は自ら退いた。そうでなければ他の者に示しがつかない。

「なあ錦。お前が女だったらどうする」

鴨が突然そんな事を錦に尋ねた。

「えっ……」

「俺も同じ事をしただろうな」

そう言つて、郷里に置いてきた妻奈絵に思いを馳せた。

奈絵は自分の身の上を当然のように受け止めているのだろうか。いや、そうではあるまい。従順であるべく躡られているといつても、それなりの決心を抱えて嫁ぎ、自分を京へと見送つたはずだ。

長沢千松と名乗る若い侍が女だと、最初に見破つたのは鴨だった。

気付いた時、鴨は琴の二の腕を掴んで引き寄せ、凄んで見せた。

「他の者は騙せても、俺には通用せんぞ」

後ろ姿の腰付きが男とは違う。それに喉仏がない。

「どうか見逃してくれ。行きたいのだ、京へ。国のために働きたい」

女は帰れと言う鴨に、琴が食い下がった。

「行つてどうする。足手まといになるだけだ」

「どうしてそう断言されるのか。女だからですか」

「そうだ。余計な揉め事が起きるだけだ」

鴨も錦と同じ事を琴に言ったのだった。

「男と女は志を同じくして、共に進む事は出来ないと言われるか」

「そんな事が出来ると思うか」

「そう有りたいものです」

悔しさで声が震えている。琴は俯いて唇を噛んでいる。

「やれるなら、やってみるんだな」

鴨は見逃した。むげに扱う事もないだろう。そして琴は長沢千松として、まんまと浪士組に潜り込んだ。

「そうは言っても、他の者の目に留まるような事にでもなれば、面倒です」

「そうならなかったで、お手並み拝見といこうか。なあ錦」

「相変わらずだな、先生は」

鴨はこの事態を面白がっている。錦は苦笑した。

「どうだ、仲をとりもってやろうか。えっ、錦。なかなかのべっぴんだ」

「何言ってるんですか。冗談が過ぎますよ。そういうのが揉め事の発端になるんだ」

錦は目の縁をまします赤らめて、足早に三番隊へ戻った。

「面倒が起こったら、收拾をつけるのは、先生ですよ」

言い置いた錦は、珍しく頬を崩して笑っていた。

鴨はふっと首を傾げた。

そう言えば、錦とは女の事で軽口など言い合ったことなど無かった。

「あいつは尖んがってばかりで、痛くてかなわん」

「何かおっしやられましたかな。芹沢先生」

清河八郎が声をかけた。

「いや、独り言ですよ」

三番隊を退いた後、八郎のはからいで取締り役付きに復帰し、鴨は先頭の一団の一人となっていた。

峻嶺和田峠は、激しい風雨に見舞われた。ものも言わず、俯いたままただ歩く。しとどに濡れた笠から雫がしたり、鴨の唇を濡らした。

この日、宿では劳いの酒が振る舞われた。久しぶりの酒の旨味が鴨

の五臓六腑に染み渡っていった。

浪士組はやがて木曾路に分け入る。積もった雪が街道を覆い、吐く息が白く凍えた。

鴨には草鞋や足袋に凍みる冷たさが、この行軍の容易ではない先行きを暗示しているような気がしてならない。

それを考えると、女が独り紛れていようが、それは大した問題ではなかった。

本庄の宿を出てからこっち、どうやら面倒の矛先は鴨に向けられているようだった。

気付くと琴の視線が、鴨に向けられている。気のせいだと思いたいが、それは日増しに濃厚となり、確信へ変わった。鴨は辟易とした。お手並み拝見と言われているのは、どうみても鴨の方だった。

「惚れられてるんじゃないですか？」

ほらみたことかと笑いを堪えている錦の肩が、小刻みに震えた。

「参ったな」

「なんでも面白がるから、罰が当たったんだ」

「言わせておけば……」

しかし、困った。あからさまに見つめられたりすれば、情にほだされてしまうではないか。

普段は強気の鴨も、こと女に關してはだらしない。遊里の女ならまだしも惚れられてしまうと、それが人様の女であるうが、構いはしないのだ。

女は女で、こういう危なっかしい男を放つてはおかない。言い寄るのはたいがい女の方だ。それをそのまま受け入れてしまうのだから、鴨の情に流されやすい質も善し悪しだ。

つい手を出した女に纏わりつかれ、別れる別れないで揉めたこともある。別れるなら殺してくれると女がすがりつくので、危うく切つて捨てる所だった。若氣の至りだ。

休み処へ入ったところで、鴨は琴に苦言を呈した。

「おい、千松よ。いったいどういう料簡だ。うるさくてかなわん」

「あんたに惚れてしまったんだから、仕方がない」

「お前のように小便臭い女に、思いを寄せられても迷惑なだけだ」

「抱いてもみないくせに、何を言うか。見た目ではないぞ」

琴は一步も引かない。茶を啜りながら涼しい顔で言つてのける。

「あの男などはどうだ。なかなか姿のよい男だぞ」

鴨は錦の方を顎でしゃくつてみせた。

「ごめんだな。整い過ぎている。堅物は人を粹にはめようとしてだ

めだ」

「男はみなそうだ。女を粹にはめたがるものだ。俺も妻を粹にはめたまま、ここにこうしておるわい」

「それに甘んじたい女は多い。ただ自分がそうではないだけだ。男だってそうだろう。世の中の魁となりたい者もあれば、ぬるま湯に浸かっていたい者もある。それと同じ事ではないか」

琴の言い分は道理になっている。

「これとそれとは別の話だ。論をまぜこぜにするな」

「それに、執着するの也被れるの也被まん」

「俺なら後腐れがないという訳か。さて、どうだか。いざとなると俺の方がしつこいやもしれんぞ」

「執心は困るが、床の中でしつこいのは、一向にかまわないな」

琴は思い切った事を言う。これでは、並の男は後退りしてしまうだろう。

「京へついたら、どこぞで試してみるか」

「望むところだ」

団子を食いながら、女とする話ではない。それにしても面白い女だ。こういう話が臆面もなくできるなどは珍しい。たいがいの女は、何を言いなさるえと心にもなく身を擦らせてみせる。

存外琴は、供に国事に向かつて歩んでゆける数少ない女かもしれないと鴨は感じた。

「埒もないわ」

鴨は立ち上がった。

「とにかく、道中纏わりつくな。一戦交えるなら京へ付いてからだ。よいな」

しかし、甘い顔ばかりもしてはいられない。鴨は琴を見据えた。

「ただな、千松。戯言を言つてはおるが、俺とて国事には命がけだ。侮るな。心しておけ。それに子供じみた事は金輪際するな。胸の内に留めておけ」

琴は鴨の真顔に背中がひやりとした。そして自分の浅はかな料簡を恥ずかしく思った。身がひき締まる。鴨に続いて琴も立ち上がった。足高に履いた袴のビロードに縁をはたく。細かい砂埃が舞い上がった。

中山道は草津より東海道に合流する。山科を経、栗田口より蹴上を通り、一行は京三条大橋へ辿り着いた。

いよいよ天子様のおわす京の都だ。懷に抱えてきた密命が、とたんに息を吹き返し、疼くように鼓動を始めた。やるべき事が、今目の前に迫ってくる。腹の底から迸る感慨が、身体を熱くいきり立たせた。

江戸を出て十六日。文久三年二月二十三日。

そして、漸く始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116b/>

文久三年のレクイエム

2010年10月11日19時23分発行